

第七章 平和な街 南京

一 難民区の国際委員会

藤田清氏 独立軽装甲車第二中隊

十二月二十一日、中隊は城内の軍官学校に移転した。この頃は戦禍も整理され、治安維持会が設立されて街にも住民の姿を見るようになった。私たちは城内の宿舎で餅をつき、しめ縄を飾って陣中の正月を迎えた。久しぶりに寛^{くわん}ぎ、宿舎や周辺の整理に忙しく、公務以外には外出は禁止されていた。

中隊では中国人を八人ほど炊事や雑役に使い、隊内の別棟に住み込ませていたが、十四歳の陳少年は兵隊たちに可愛がられていた。彼は、

「ぜひ、日本に連れて帰ってくれ」

と、頼んでいた。これは皆知っていることだが、私たちは戦闘以外では中国人と仲良く暮らしていたのである。

中隊の軍規は厳正であったが、百二十名中ただ二人だけ、夜になるとこっそり隊を抜け出

す不心得者がいたことは事実です。将校は知らず、私も報告しませんでしたがおそらく女遊びに行ったものと思います。城内の飛行場近くには、遊郭ゆうかくのようなものがあつたことは覚えています。

またごく一部の者が、婦女子を犯したことはあるでしょう。しかし、二万件なんていう話は論外です。

（『敵本戦史』）

南京の街には、すっかり平和が戻ってきたのである。だが藤田氏の言にもあるように、いかに軍規をひき締めても、不心得者をまったくなくすることは不可能である。

それは戦場、軍隊という特殊性もあるが、それより、人間社会の性さがだと言うべきであろう。平和ほけするほどの今日でも、毎日殺人、強姦と事件の絶え間はないのである。

それを思えば、これだけの軍がいるところで不祥事零ということはありえない。大西参謀もたまたま強姦現場に出くわしその兵を張り飛ばすと、憲兵隊まで引つ張っていったという。だが中には、女性に声をかけただけで勘違いされ、憲兵隊につかまった者もいる。

入城式の後、松井大将は憲兵隊長からこれら強姦、掠奪等数十件の報告を聞き、強い不快の念を示されたという。だが実際には、摘発されないこれらの事件は、まだまだあつたと思う。

では、難民区を統括していた国際委員会ではどう主張しているか。二月九日までの二月弱の間に、南京城内で起きた日本軍の犯罪行為として次のように挙げている。

「殺人四十九、傷害四十四、強姦三百六十一、掠奪他百七十、連行三百九十件」

これを領事館などを通し、各国外務省に送付しているのである。もちろん日本の領事館にも送られ、さらにこれは本省へも届けられている。

福田篤泰氏 日本領事館外交官補

難民区の中にある安全区国際委員会へは、毎日のように行きました。事務所の中にと、次々と中国人が駆けこんできては、

「今あそこで日本兵が、女の子を輪姦している」

「太平路で掠奪をしている」

などと、訴えるんです。するとそこにいるマギー神父とか、フィッチなんていう三、四人の人が私の眼の前でどんどんタイプしていく。それで私は、

「おい、ちょっと待ってくれ、本当かどうかの検証もしないで書類を作り抗議されても困る」

って言ったんです。それは、何度も注意しました。そこで彼らを連れ、その強姦とか掠奪

とかの現場へ駆けつけてみると、何もないんです。その形跡すらない。住んでいる人間すらいなかったりする。そんなことが、幾度もありました。

ある日も、米国副領事の 에스ビー氏から抗議があつて、

「下関シヤークンにある米国所有の木材を、日本軍がトラックで盗みだしているから、何とかしてくれ」つて言うんです。朝の九時頃でした。これはいかんと思つて、すぐ司令部に電話し、本郷参謀にも同行を頼み、副領事と三人で雪の降る中を下関へ駆けつけたんです。ところが現場についてみると、人っ子一人いない。倉庫には鍵がかかっているし、盗難の形跡すらないんです。

「困るなあ、こんなことでは」

と、さすがに私も厳しく注意したんですが、とにかく、こんなことのくり返しでした。インパーリーが記事にした、「中国における日本軍の暴虐」なども大方はこういう現場も見ずに書いた書類が元になっている、と私はそう思つてます。

福田篤泰とくやす氏は戦後政界に入り、郵政相などを歴任しているが、この回想は氏と親しい間柄であった田中正明氏が聞き書きをし、著書『南京事件の総括』に載せているのだが、これで当時の国際委員会なるものが、どういうものであったかが分ろうというものである。

これでは国際委員会の報告書も、まともな史実とするわけにはいかないが、さらにこれを元にしてティンパリーののような記事が書かれていく。たとえ書類の末尾には、検証はしていないという一語が付されていても、彼らはそんなことは無視していく。なるべく衝撃的な記事にしたい、そのほうが面白い、ということもあるかもしれぬ。とにかく四面楚歌^{そか}、日本憎しの感情が先にたつてのことだから、何を書かれてもいかんともなしがたい。そしてその記事を読んだ人は、酷いことをするものだと思ひこまされていく。

ここに、国際的孤児日本の姿を見る思いだが、それでも、国際委員会が捉え得た日本軍の悪業はこの程度であつた。もし仮に難民区の市民が百人でも二百人でも虐殺されたら、それこそ彼らは夢中になつて書類にし、また記事になり、たちまち全世界に知らされていったに違いない。

そしてそれは、ただちに国際連盟のとりあげるところとなり、日本非難の決議となつたに違いない。それは当時すでに、国際連盟では「支那事変問題小委員会」を作り、南京にたいする無差別爆撃を非難する決議などが、採択されていたからである。中国代表の顧維均は、国際輿論^{よろん}を喚起すべく日夜奮闘し、日本の非行を次々とあばいていったのである。

無差別爆撃もその一つだが、実際には難民区に爆弾はまったく落ちていないし、それどころかあの反日的な安全区国際委員会が、日本軍にたいし感謝の意を表してきたのである。それは委員

長のジョン・ラーベ氏からのもので、東京裁判で弁護人から提出され明らかになったのだが、とにかく事態かくのごとくして、国際間において日本の非行は語られても、大虐殺などという話題は、一言半句も出てはいない。

もしあつたとしたら、顧維均はそれこそ国際連盟の場において、大演説をぶつたであろう。そしてまた一つ強力な日本非難が決議されたであろうことも間違いないところだ。

無差別爆撃といえ、国際間の主張などというのは実に身勝手なものだと沁々思わざるをえない。それは、蘆溝橋に続いて上海に戦火があがつた時、まず上海の市街を空襲したのは蒋介石軍であつたということだ。

しかも繁華街を無差別爆撃をし、その死者は五百人近くに及んでいる。そしてこの中には米国人宣教師なども含まれていたこともあり、さすがに米国は蒋介石に注意をうながしたのである。そのわずか数ヶ月後に、実際にはしてもいない日本軍の無差別爆撃の非難決議をするというのだから、いかに身勝手なものであるかということである。

しかも米国が、その後日本本土に行った空襲は、文字通り無差別そのもので、百万もの一般市民が犠牲になつたのである。こうしたことを思えば、国際間の非難決議なるものも、当時はいわば宣伝合戦の場であり、この南京事件そのものも、結局は宣伝戦における敗北の結果だと言つていい。

こうした宣伝戦がくり展げられている中で、反日輿論の喚起にいま一人大きな役割を果たした人がいる。それは蒋介石夫人の宋美齡であった。彼女は重慶を密かに脱出し米国に渡り、得意の英語と社交上手を活用し、対日非難と援蔣運動を続けていったのである。だがその彼女の口からも、大虐殺の話は出ていない。せいぜいダーデインの記事程度の暴虐を言っているにすぎないのである。

しかしそれでも、米国内の反日感情をおおるには大きな効果をあげた。そしてそれが日米交渉にまで影響したと言われているのだが、それを支えたのが、国民政府の持つ強力な情報網であったことも知られている。したがって、南京の状況などは、国民政府に筒抜けだったと見るのが至当であろう。

その宋美齡女史は、九十余歳の今日でもなおかつ健在で、台北の国民政府にたいしても隠然たる力を持っているのだから、半世紀というのは長いようで短い月日と、奇妙な感慨が生ずる。

渡辺義雄氏 外務省情報部特派カメラマン（のち日本写真家協会会長）

支那事変が始まるとすぐに、上海の停車場で泣いている中国の赤ん坊の写真が、アメリカの新聞に載り、これがずいぶん話題になりました。日本はひどい、こんな子供までも、という世論がアメリカに起こり、これがきっかけでアメリカはそれまで以上に中国に同情して、

日本に敵対するようになりました。

ところがこの写真は、もともと泣いている子供を抱こうとしていたのかそこに置こうとしていたのか、父親らしい大人がそばにいたものですが、父親をブラシで消して赤ん坊が一人で泣いている写真にしたものです。それがどういうルートかアメリカに持ち込まれ、話題になりました。またその頃はこのような衝撃的な写真はありませんでしたし、戦争の初期だったので、ずいぶん効き目がありました。

戦後になって、アメリカの写真雑誌が、父親もうつつているオリジナル写真を載せています。

修正の技術は大正時代からありましたから、よく見ればわかるはずですが。私は戦後、日本大学で報道写真について教えていましたから、このことは印象的でした。

当時、中国はこういう謀略をよくやっていました。それで外務省も、本当の日本軍を分ってもらうため、写真と映画を撮って、それを世界に配布しようということになりました。特にアメリカに聖戦の実体を知ってもらいたいということでした。聖戦の実体の一つに、宣撫班が難民を救済しているということがありましたので、私の仕事はそういう場面を撮ることでした。

以前チエコの臨時代理公使をやっていて、その頃は情報部にいた小川昇一等書記官が団長

となつて、上海と南京に行くことになりましたが、小川さんは芸人で、浄瑠璃もうなる人でしたから、楽しい旅行でした。上海に着いてその日は旅館に一泊し、次の日に南京に向つたと思います。掃海艇に乗つて揚子江に行きました。西条八十なども一緒に、他に多くの従軍作家や従軍画家がいました。

(阿羅健一著『聞き書き南京事件』)

吉岡忠一氏 鹿屋海軍航空隊分隊長・海軍大尉
昭和十二年八月十四日、支那空軍の本拠地杭州飛行場を急襲すべく、鹿屋航空隊と、木更津航空隊の中攻各十八機、計三十六機は、早朝、鹿屋隊は台北の松山飛行場を、木更津隊は濟州島をそれぞれ出撃しました。

だが、その日台風のため東支那海はものすごい暴風雨となり、木更津隊は全機引き返し、鹿屋隊も十二機が引き返したのですが、私の分隊六機だけは海を渡りきり杭州飛行場を奇襲することができました。お陰で、大戦果をあげられました。

以後、南京などの飛行場を攻撃しましたが、攻撃目標は地上の飛行機と格納庫です。市中の無差別爆撃など、もちろんやっていません。爆弾の数が少ないんですから、もったいなくて飛行場いがいには投下できませんよ。

五時間もかかつて、やっと目標に到着するんですが、九月の末までには、支那空軍の三百

五十機を全部撃滅したと思います。それでも当初は戦闘機が必ず迎撃してきましたし、地上砲火も熾烈でしたから、我がほうにも損害はでしたが、それでも九月以降は、護衛の戦闘機もつき、空中戦闘はなくなりました。

南京陥落直後の十三年正月、中攻隊を率いて南京飛行場に進出しましたが、市中はどこも平静で何ら異常は見られませんでした。大虐殺なんていうのは、あれは大嘘です。

ここでの中攻というのは、九六式陸上攻撃機のこと、海軍では爆撃機、雷撃機のことを、攻撃機といった。そして、これをさらに改良したのが、一式陸攻である。

これで、無差別爆撃などまったくなされていけないことが分る。

なお吉岡氏は、昭和十六年の開戦時、参謀として真珠湾攻撃に参加、だが敗戦後、比島の米軍から、これが騙し討ちであったと聞かされ驚く。聯合艦隊の山本五十六大將は、攻撃三十分前に、最後通告がなされるよう、外務大臣にかさねて念をおしていた。

しかし、実際には大使館職員が一時間の通告遅れをするという、大失態を演じていたのである。ために、今日いまだに「真珠湾を忘れるな」と、卑怯な騙し討ちの代名詞となり、これによって海軍のみならず、日本人全体が卑劣である、という汚名を着せられてしまった。にもかかわらず、驚くべきことには、その重大な責任を外務省はまったくついでないことである。



十六師團參謀、木佐木久少佐描く（『南京戦史』より）

二 戦争被害調査

いま一つ中立国の眼として、重視されている情報がある。それは金陵大学教授のルイス・スミス教授が多くの学生を使つての戦争被害調査である。南京城とその周辺一帯における人的被害だが、それによると、

1	砲爆撃・流れ弾による死者	八五〇名
2	兵士の暴行による死者	二、四〇〇名
3	拉致 <small>らち</small> された者	四、二〇〇名
4	原因不明の死者	一五〇名
5	その他近郊江寧県での死者	九、一六〇名
	合計一六、七六〇名	

これが、南京戦前後三ヶ月間における一般市民の犠牲者だという。当時欧米人の日本軍を見る眼は、まことにきびしいものがあつたのだが、その鋭い眼をもつてしても、市民の被害総数は一万五千だったのである。

これをもつてしても、言われるごとき大虐殺などまつたくの虚言であることは明白だが、さらにその内容について見ていくと、日本軍による不法行為と思われるものは、きわめて僅少であることが分る。

1 砲弾や流れ弾による死者、つまり戦火による巻きぞえを挙げているのだが、戦闘地域にはほとんど住民がいなかったことと、難民区には一発の砲弾も落ちていないこと、などを併せ考えると、たとえ広範囲にわたる戦闘であつたとしても、八百五十は少々多すぎる気がしないでもない。

2 次の兵士の暴行による死者だが、これをそのまま日本軍の行為とするのは早計で、エスピー氏も言っているように、中国兵による暴行掠奪、そして殺人が多発していたことを考慮せねばならない。つまり加害者が判然としないし、また女性による便衣行為もあり、それにたいする対応も含まれているかもしれない。

3 市民の拉致らちについても、中国兵による行為が多かつたのも事実である。難民区にいた中国人の談話がそれを物語っているのだが、これは昭和十四年当時、福岡日日新聞に載つた記

事である。

中央軍の兵士が銃剣を持って夜となく昼となく交るやうに來て難民區を檢察し、お金を見れば一錢でも二錢で巻き上げていきました。もつとも恐がられたのは拉夫、拉婦で独身の男は勞役に使うため盛んに拉致されて行きました。中央軍の横暴は全く眼に余るものがありました。

（阿羅健一著『聞き書き南京事件』）

なぜ中國軍が住民を連行したかという、その多くは揚子江上流にある炭坑などの労働者として使ったもので、またそのほかにも軍用の人夫が必要だったからである。

さらにこの拉致の中には、難民區の便衣兵抽出も含まれていると思われる。とすれば、被害数がそれと重複することになるので、それを除外せねばなるまい。それに避難していた者、労働させられていたがその後復歸した者もいるかもしれないし、それこそそのまま他に永住してしまつた者としているかもしれないのだ。

4 原因不明の死者というのは分りにくい、病死として皆無とは言えないであろう。

5 原因は右と同様だが、南京近郊においても、ほぼ同数の犠牲者があつたということである。

城外では戦闘の巻きぞえは、確かにあったでしょう。しかし、故意に市民を殺したなんてことはありません。城内でももちろん、一人もありません。ただ城外で食糧徴発などのおり、暴行、強姦、殺傷などがあつたかもしれせん。だが、私の部隊では一人もありません。

このスミス調査の市民犠牲一万五千なんて、とても信じられません。あつたとしても、三分の一の五千人、各師団千人となりますが、そんなにはない。いや、もっと少ないでしょう。とにかく戦場では、市民を見ていないのですから。

そしてさらに念頭におくべきは、スミス教授の手足となつて、実際に調査にあつたのは、多くの学生であつたということ、彼らは最も反日感情の強い人々であつたから、その質問の仕方いかんによつては、その内容も影響される。まして質問を受ける側も反日感情が強い場合には、よりいっそうその傾向は強くなる。

それでも五十戸に一戸の割合で調査しそれを五十倍としたところなど、かなり綿密な調査であることは確かである。

スミス博士が主張するように、社会学としての学術的な調査ということもうなずけるし、戦後になつてもこの主張を曲げず、東京裁判にもこれをこのまま提出し三十万虐殺の主張に否定的見

解を示すところなど、学者としての筋を通すところは立派である。

このように、もつとも公正といわれるスミス調査とてなおかつ誇大な数字とみられるのである。まして今日言われるような一般市民の大虐殺など、その痕跡こんせきすら認められない。

三 報道班員の言

南京攻略戦のしめくりとして、この戦いに終始従軍し、その眼でその足で、そして肌で実感してきた報道関係者の言を聞いてみよう。

これらの人々は前線で弾雨の中をかいくぐって来ただけでなく、広く各司令部や指揮官という上層部との交流がある人もあり、全般的に作戦を把握し得る立場にあつた貴重な存在である。

そして報道関係者は、軍人のように戦争の当事者ではないから、それだけ戦場を客観的に見られるという立場でもある。したがつて虐殺問題に関しても、その発言は軍人以上に貴重だとも言えるわけだ。ただし、それは実際にこの作戦に従軍し、南京という街を歩き廻つた人だけに限られる。

その南京作戦に従軍した報道関係者、それは各社総計で百二十五名くらいとされている。各社いずれも選り抜きの腕きをそろえてのことであろうが、この中には石川達三、木村毅、林芙美子などの作家、あるいは西条八十、草野心平のような詩人、そして画家など実に多士済済である。

また大宅壯一の名なども見られるが、この時はまだ若く二軍的な存在であったようだ。

しかしそれからすでに五十五年という歳月が流れ去り、多くの人々はすでに鬼籍の人となられた。また、健在の方も八十歳前後。だが幸いにも、それらの方々のお心が、様々な形で残されている。その一つに阿羅健一氏の『聞き書き南京事件』という著書などがあり、すでに渡辺氏のは転用させていただいたが、さらにその中から幾つかを部分的ではあるが、大事なところを拾ってみよう。

三苦幹之介氏 みとま 福岡日日新聞記者

私は陥落直後の南京を見ておりますから、自信をもっていえることですが、大虐殺の話なんか見ても聞いてもおりません。痕跡すら何一つありませんでした。

昭和十四年の春になり、私は南京支局長を命ぜられて、再び南京に行きました。それから南京に足かけ六年いて、現地召集で応召し、漢口で入隊、長沙方面に向いました。終戦になり、召集解除後、南京居留民の一万人と一緒に南京城外の旧日本軍兵舎に収容生活を送り、半年ばかりして引き揚げてきたのですが、この間一度も虐殺の話聞いていません。

虐殺の話を知ったのは、例の極東裁判で問題にされたからです。あれは戦勝者のでっち上げです。私は、全く信じておりません。

十日夕方になり、光華門のそばに築いた壕で、やっと日の丸が振られるのが見えたので、必死の覚悟で撮りました。この写真をもとに石井貞二記者が、南京城最初の日章旗、という記事を書いたんです。十三日には、光華門を完全に占領しましたが、私もここから城内に入りました。

戦後になって、南京で何万人もの虐殺があったと言われていますが、不思議でしょうがないんです。私は当時、南京をやたらに歩き廻っていますが、虐殺なんて、見たこともありませんし、兵隊から聞いたこともありません。

毎日新聞は、あの時、連絡員も入れて、五、六十人もいたでしょう。新聞社の仕事は、陥落するまでですから、東京から特派された人たちは帰りましたが、上海支局の人は、志村冬雄支局長以下残りしました。私も、カメラマンが必要だということで残ったんです。

そして一月ほど南京にいたわけですけど、戦後言われているようなことは、何ひとつ見えないし、聞いてもない。支局長の志村さんは、軍司令部にも出入りしていましたけど、志村さんからも聞いたことはありません。ですから、松井大將が絞首刑になったのも、不思議でしょうがないんです。

それは、屍体は見ています。なにしろ、あれだけの激戦ですからねえ。それに、包囲作戦

をとっているんですから。屍体があり、濠に流れているのもあたりまえです。難民で、撃たれて死んだのもいるかもしれません。

それが、戦争です。それを虐殺と言うのなら、戦争はみな虐殺になるでしょう。それは、戦場を知らない人間の言うことです。

南京戦後、一度東京へ帰って、また上海に行き、それから徐州会戦、漢口作戦に従軍し、大東亜戦争がはじまってからは、南方へ行き、最後はルソン島で、山中を一人歩き廻っていました。

ところが、戦後になって、その時々の記録や体験記を読むと、間違っていたり、自分勝手な記事があまりにも多いので、吃驚びっくりしました。南京虐殺なんかも、そういうものです。

佐藤振寿氏 東京日日新聞カメラマン

十三日に、中山門から城内へ入りました。その日は中山門で写真を撮りましたが、南京陥落という写真をもっと欲しいと思ひ、翌十四日には国民政府だった建物があるということで、そこで写真を撮りました。これが特ダネとなり、号外になったんです。

もうこの日は、難民区の近くの通りで羅麵屋ラーメンが開いていて、日本兵が十銭払って、食べていました。それと、中国人の掠奪りゅうだつが続いて、中山路で机を運んでいる中国人や、店の戸を

こじ開け、盗んでいる者もいました。

十六日は、中山路で難民区から摘出された便衣兵の写真を撮っています。中山路いっぱいになりましたが、頭が坊主の者、ひたいに帽子の跡があつて陽に焼けている者とか、はつきり兵士と分る者を摘出していました。でも髪の毛の長い中国人は、市民とみなされていました。虐殺なんて、見ていません。

十六日、十七日ごろになると、小さな通りだけでなく、大通りにも店がでていました。たくさんの中国人が、日の丸の腕章をつけて、日本兵のところへ集つていましたから、とても残虐行為があつたとは信じられません。

もちろん、社の人たちからも、そんな話は聞いていません。

日本兵の屍体は、撮つてはいけなと言われていましたが、私は何でも撮りました。でも後になって見ても、日本兵が残虐なことをやっている写真なんか一枚もありません。この中には、日本兵が慰問袋を中国人にわけてやつてるのがありますが、たくさんの中国人が群がっている、そんなものもあります。

こういう状態ですから、虐殺なんていうことは、私がたまたま見ていないというのではなく、なかつたのだと思つてます。

でも、写真というのは、説明一つでどうにでもなるんです。

私が南京城内で撮った写真で、日本兵が荷物を背負って、向こう側に乳母車が写っている写真があります。

この日本兵は、南京もおちたので気がゆるんだのでしょね、肩の力が抜けて、肩をがっかり落として、いかにも重そうに荷をかついでいたんで、撮ったんです。自分でも経験があるから、よく分るんです。ところが、それがいつの間にか、

「徴発した荷を運ぶ日本兵」

という、説明がつけられています。掠奪だというんでしょうね。

また、同じ場面を撮っているのに、虐殺の場面になっているものもあります。戦後しばらくして発表された、平凡社の『日本写真史』にそういう説明がっていました。

同じ写真を、大毎の松尾邦蔵や私が撮っているんですが、私のは、「倒れているのは中国兵の戦死体」という説明をつけています。虐殺の屍体なんかではありません。それが、いつの間にか虐殺の場面になっているんです。それをしたのが、同盟通信の不動健治さんでした。これに気がついたので、すぐ私は、不動さんに聞こうと思いましたが、不動さんは、よく知っていました。虐殺があつたなんて話は聞いたことがありませんでした。ところが、弟さんの話によると、戦後、

「何か、虐殺の写真がないか」

と言われて、その写真をだしたんだそうです。彼の弟さんとも親しくしていたので、彼からそう聞いたのです。でも本人から直接聞きたかったのですが、その時弟さんが、

「兄貴は、もう呆ぼけているから駄目ですよ」

と言うので、そのままになってしまいました。その後、不動さんは、亡くなりました。とにかく、陥落から、二十四日まで南京にいましたが、南京事件なんていうのは、戦後聞いた話で、確か二十一年か、二十二年ごろだったと思います。

NHKの真相箱という番組があつて、ここで南京で虐殺があつたと聞いたのが、初めてです。たまたま聞いてましてね。

テーマ音楽に、チャイコフスキーの交響曲が流れて、その後で、機関銃の音や、「キヤア」と叫ぶ市民の声があつて、ナレーターが、

「南京で虐殺がありました」

つて、言うんですよ。吃驚びっくりしましたね、これを聞いて、

「嘘つけ」

と、私はまわりの人に、思わず言った記憶があります。

十年ほど前にも、朝日新聞が「中国の旅」という連載で、南京で虐殺があつたと、中国人の話に掲載してましたが、そのころ日本には、当時南京にいた人がたくさんいるわけです。

それなのに、

「何故日本人に聞かないで、彼らに都合のいい嘘ばかりのせるのか」

そう、思いました。当時南京にいた人は、誰もあんな話は信じないでしょう。それ以来、私は自宅で朝日を購読するのを止めましてね、その時、配達員に、

「朝日は嘘を書くから、とるのを止める」って、言いました。

よくあることですが、被害者は誇張して被害を語るものです。ことに南京陥落のころには、朝日の記者やカメラマンが大勢いました。そうした人たちの証言ものせずに、一方的な被害記事に終始していたのでは、信頼性ある記事にはなりません。

なお不動健治氏の写真を入手し、平凡社の写真史に載せたのは、共産党の服部総之氏であるという。この辺の消息は田中正明氏も確認しているが、写真というものが、政治的にいかに利用されているかということを、前述の渡辺氏の話も併せ思い起こしてほしい。

樋口哲雄氏 読売新聞カメラマン

聯隊本部の裏庭には、中国軍の銃や拳銃が山積みされてました。兵隊が、「好きな拳銃を持っていけ」って言いましたけど、そんなものもらってもしょうがないので断りました。

それから一月くらいいましたが、自転車を持っていたので、毎日あちこち廻りましたが、でも、どこで虐殺があったと言うのか、聞かれても全然分りません。だいいち、そういう形跡すら見たことがないんですから。あったと言われていますが、どこで、どんなことがあったというのでしょうか。中山陵なども、荒されていないし、綺麗でした。殺らなければ殺られるから、殺った。それを虐殺と言っているんだと思います

森博氏 読売新聞カメラマン

十五日か、十六日に南京へ行っただんですが、住民は敵意をもっていませんでした。逆に、便衣兵がいたので、日本兵のほうが、中国人を警戒していました。

小山武夫氏 同盟通信記者（の中白ドラゴンズ社長）

昭和十三年の夏、上海の外人記者クラブの記者たち十五名ほどと、南京難民区跡や、捕虜収容所、激戦地跡などを廻りました。説明は、陸軍報道部の人がしてくれましたが、犠牲者数、捕虜問題、その後の治安状態など、相当突っ込んだ質問ができました。

また彼らどうしも、想像をたくましくして、いろいろと語り合っていたが、今日言われているような虐殺など、質問はおろか、話題にすらおぼらなかつた。

だいいち、それから三年以上も南京に駐在し、取材活動を続けた私が虐殺などは風聞すら得ていないんですから。もしそうした事実があったとすれば何か耳に入るはずですよ。ですから私は、最近言われている南京大虐殺なんてまったく信じません。

(田中正明著『南京事件の総括』)

前田雄二氏 同盟通信記者(のちプレスセンター理事)

入城四日目に、私たちは、安全区の中にある同盟通信社の旧支局に居を移し、ここに寝泊りして取材を続けた。つまり、難民区の中が、私たちの生活圏だったが、店も開いていたし、市民の生活も回復していた。

こういう中で、万はおろか、千あるいは百程の虐殺も、ありようはずがない。いわゆる大虐殺というのは、婦女子を含む一般市民を殺したというのだが、その一般市民は難民区の中にあつて、日本の警備司令部によって保護されていた。捕虜、便衣兵への処刑、虐殺はあつたが、それは戦闘行為の枠内で論ずべきもので、非戦闘員にたいする大量虐殺の事実はない。それを、さも事実であつたかのように伝えられ、教科書にまで載るといふのは見すごせない。

何故、歴史が歪められたか、それは戦後の東京裁判史観によるものだろう。

虐殺？ 全然見たことも聞いたこともありません。夜は皆集まりますが、そんな話は一度も聞いたことはない。誰もそういうことを言ったこともないし、朝日新聞では話題になったこともありません。

難民区は兵隊や憲兵がいて入れませんでした。ですから市民は安全でした。一般市民の屍体というのは一つも見えていません。紅十字会の人が戦死体をかたづけたりしていました。

足立和助氏 東京朝日新聞記者

今年の春に朝日新聞の論壇係から私のところに電話がありましたね。守山君がベルリンにいた時の話です。

ベルリンで、守山君は日本の留学生と飯を食ったことがあり、その時留学生に、南京で大虐殺があったと語ったというのです。その留学生が今は有名な大学教授になっているそうです。私はその名前を聞くのは初めてでしたが、その大学教授がベルリンで守山君から聞いた話を論壇宛に送ってきたというのです。守山君の語った話というのは、日本軍が南京で老人・婦女子を殺し、あまりたくさん殺したので、道路が血でいっぱいになり、守山君がはいっていた半長靴に血が流れ込むほどだった、というものです。守山君がこういう話をしたとい

うのです。

論壇の係は、私が南京で守山君と一緒にだったし、親しかったということを誰かに聞いて、この話を確かめようと電話をかけてきた訳です。

そこで私は、たしかに南京では守山君と一緒にでしたが、そんなことは見ていないし、後で守山君から聞いたこともない、守山君は嘘をしゃべるはずはない、その大学教授はどんな人か知らないが、その人がいつていることは嘘だ、そういうことが載るなら守山君の名誉のために残念だ、といました。

論壇係は私の話を聞いて納得したようです。教授の原稿をボツにしました。南京大虐殺については意識的に嘘をついている人がたくさんいるんですよ。

橋本登美三郎氏 朝日新聞南京派遣記者団キャップ（のち自民党幹事長・運輸相）

南京事件ねえ、全然聞いていない。もしあったとすれば、記者の中で話がでるはずだ。記者というのは、少しでも話題になりそうなことは、互いに話をするし、それが仕事ですからねえ。噂うわさとしても、聞いたことがない。

朝日では、現地記者を集め、座談会もやったが、あったなら話がでるはずだ。

報道規制？ 何も不自由は感じていない。思ったこと、見たことはしゃべれたし、書いて

いた。

私が編集局長の時、南京に特派した記者たちを集めて、一人一人聞いてみたが、

細川隆元氏 元朝日新聞編集局長

「そのようなことは、見たことも聞いたこともない」

という返事ばかりだ。何万、何十万なんていう虐殺など、絶対がない。

〔「時事放談」昭和六十一年八月〕

それからすでに半世紀、いまだに南京大虐殺と書きたてる記者諸公がいる。だがその人々は、これら大先輩の言をどう受け止めるのだろうか。

当時、従軍された記者の中からもかなりの犠牲者が出ているのだが、それは文字どおり命がけの取材であつたことは確かだ。その人々の貴重な証言を、南京戦どころか戦場そのものすら知らぬ今の記者諸公が、それを否定するとあつては、そもそも報道や新聞そのものの否定になつてしまふ。

それとも、当時の報道も新聞もすべてが嘘だったとでも言うのだろうか。いずれにしても、真実は一つしかない。いずれがまことであるか、後は個々の人々の良識が判断してくれるであろう。

第八章 記事に殺された元軍人

終戦の翌年、昭和二十一年の春であった。

陸軍大尉向井敏明氏は、長い戦場生活を終え復員し、宇治山田市の自宅に落ち着いた。そして三月ほどがたち、やがて夏を迎えようとする六月の末に、一人の警察官がやって来たのである。

「実は米軍が、向井敏明という人を捜しているのですが、あなたは北岡さんですよね」

と、言う。この時すでに、彼は北岡家の養子となっていたからで、それで向井敏明という人物の存在がなかなか分らなかつた、というのだ。

「それなら、北岡さんでいいじゃないですか」

と、警察官はつけ加えた。出頭しなくても、それで通してしまつたらいい、ということだ。この頃は、巣鴨の拘留所には多くの戦争犯罪人容疑者が収容されていたし、横浜の軍事法廷ではB級級の戦犯が次々と裁かれ、すでに極刑も相次いでいた。そうした状況下での、米軍呼び出しである。警察官も同じ日本人として、逃亡をすすめたくなくなるのも人情であった。だが向井氏は、

「いや、私は別に悪いことはありません。それに、私が行かなかったため困る人がいてもいいじゃない、出頭しましよ」

と、答えたのである。まっ正直な彼は、戦犯裁判にも正義はあると思っていたのかもしれない。だがすでに横浜の軍事法廷でも、無実の青年が死刑になった例は多い。「私は貝になりたい」という劇が後に有名になったが、これなどもそうした裁判の実情をよく物語っている。

七月の一日、向井氏は上京し市ヶ谷にあつた米軍の検事局へ出頭したのである。心配した実弟の向井猛氏が同道したのだが、米軍の尋問は呆つ気ないほど簡単に終つた。そこでは南京攻略戦当時の新聞記事について聞かれたのだが、その百人斬りの話は記者が勝手に書いたもので、事実ではないと説明すると、すぐ分つてくれたのである。そして、

「記事によつて迷惑を受けるということは、米国でもたくさんあります」

と、パーキンソン米軍検事は、かえつて慰めの言葉をかけてくれたのであつた。それほど記事には信憑性がないということだが、またここには正義がまだ存在したということでもあつた。

それから一年の余、向井氏とその家族は平和な日々を送り、このまま何事もなく過ぎていくかに見えた。しかし昭和二十二年の夏も、ようやく終ろうとする九月の二日に、またも向井氏は呼び出しを受けたのである。

しかも今度は、いきなり地元の警察に留置されるという、ただならぬ雰囲気であった。後にして思えば、はじめから重要戦犯としての指名が、中国側からなされていたものとみえる。

やがて向井氏は東京へ護送され、巢鴨の拘留所に拘留された。容疑はやはり前回と同じ、南京戦当時の百人斬りの記事が元で、それが残虐行為にあたるというらしい。弟の猛氏が、やつとの思いで面会にこぎつけると、戦犯用の囚人服を着せられた向井氏は、

「とにかくあの記事は、本当のことではない、ただの創作なんだということを、記事を書いた浅海あきみという人に証明してもらってくれ。それと、戦友たちの証言もほしい」

と、小声でしかも口早に言う。盗聴マイクがありうっかりしたことは言えないというのだ。やはりかつてない緊張した雰囲気であった。ではその問題の記事というのは、いったいどのようなものであったのか。

(紫金山麓にて十二日浅海、鈴木両特派員発)

南京入りまで「百人斬り競争」といふ珍競争をはじめた例の片桐部隊の勇士、向井敏明、野田毅両少尉は、十日の紫金山攻略戦のどさくさに、百六対百五といふレコードを作つて、十日正午両少尉はさすがに刃こぼれた日本刀を片手に対面した。

野田「おいおれは百五だが、貴様は？」向井「おれは百六だ」両少尉アハハ。結局いつま

でに、いづれが先に百人斬ったかこれは不問、結局「ぢやドロンゲームと致さう、だが改めて百五十人はどうぢや」と忽ち意見一致して十一日からいよいよ百五十人斬りがはじまった。十一日昼、中山陵を眼下に見下ろす紫金山で敗残兵狩真つ最中の向井少尉が「百人斬りドロンゲーム」の顛末を語つてのち、

「知らぬうちに両方で百人を超えていたのは愉快ぢや。俺の関の孫六が刃こぼれしたのは、一人を鉄兜もろともに唐竹割りにしたからぢや。戦ひ済んだらこの日本刀は貴社に寄贈すると約束したよ。十一日の午後三時、友軍の珍戦術、紫金山残敵あぶり出しに、俺もあぶり出されて、弾雨の中を「えい、ままよ」と刀をかついで棒立ちになっていたが、一つもあたらずさ。これもこの孫六のおかげだ」

と飛来する敵弾の中で、百六の生血を吸った関の孫六を記者に示した。

これがその当時、東京日日新聞に載った記事なのである。だがこれを読んでまず感ずることは、話があまりにも荒唐無稽（こうとうむけい）、講談本ならいさ知らず、真面目（まじめ）に戦況を案じている読者にしたなら、肩すかしを喰つたような記事だということだ。

人間を鉄兜ごと真向唐竹割りに切れるものかどうか、そんなことは子供だつて分ることだ。武勇伝をでつち上げようと思つたのだろうが、実際に日本刀を手にしたことのある人間なら、こう

した発想は決して出てこないものだ。

それに一人の敵を倒すということが、どんなに困難なことかには思いをいたすからでもある。ばったばったと敵を斬りまくるなどというのは、あくまで日本刀を知らぬ人間の創り話でしかないのである。

当然ながら、当時すでに良識ある人々から、この記事にたいしては痛烈な批判がなされていた。いかに軍国調華やかな時とはいえ、そうした声が雑誌などに出てくるのは当り前で、新聞は面白ければいいというものではない。

米軍の検事が、記事に現実性なしと判断するのも当然であった。

しかし今回は状況一変し、その記事を証拠として残虐行為の責を問われそうなのである。となれば、記事を書いた浅海一男氏自身に、ただの創作であったと一筆書いてもらうほかはない。記者として立場上具合の悪い思いをさせることになるが、今はそんなことは言っていられない。

実弟向井猛氏の証言集めの行脚が、この日から始められた。もちろんまっ先に訪れたのは、毎日新聞の浅海一男氏であったが、何故か氏にはなかなか会えなかった。そしてやっと会えたと思つたら氏は言を左右し、何としても記事は創作であったという、大事な一行を書いてくれないのである。

そうこうしているうちに、向井敏明氏は南京へ送られてしまった。そして、市内の戦犯留置所へ入れられたのである。そこにはすでに三十人ほどの日本人が戦犯容疑ということで収容されていたのだが、新たに送られてきた向井氏と野田毅氏、そしてもう一人同じような三百人斬りという容疑の田中軍吉氏、この三人は初めから他の人々とは扱いが明らかに違っていた。

やはりこの三人は、南京大虐殺の犯人とすることで、中国側にとっては重要な戦犯だったのである。

十一月六日、第一回の国防部 審判戦犯軍事法廷なるものが開かれた。

法廷は、南京飛行場のすぐ前にある洋風の大きな建物で、旧日本軍の防疫給水部が入っていたところであった。他の人々は皆、いずれも収容されている建物のすぐ二階が法廷にあてられていたのだが、法廷からして三人は別格の扱いであった。

この三十人ほどの人々の中には、香港総督だった磯貝廉介、北支軍参謀長の高橋亘氏など中将が四人いたし、男装の麗人と言われた川島芳子なども、一時ここに収容されていたという。だが中国側にとっては向井氏たちのほうがはるかに重要人物だったのである。彼らがいかに南京事件なるものを立件しようとしていたかが、こうしたところからもよく窺うかがい知れるのであった。

法廷は普通の裁判所と同じように、前の一段高いところに五人の裁判官が並んでいた。中央が

裁判長の石美瑜少将、そして左右に二人ずつ大佐級の法務官が並ぶ。また検事と弁護士、それに通訳もつけられているから、一応外見上からは法廷としての体裁は整えていた。

だがその内容たるや、とても法廷などと言えるようなものではなかった。もつともこれは、南京の法廷だけではなく、他の上海、広州などの戦犯法廷とて同じだが、そのでたらめさ、いい加減さはとても尋常一様のものではなかった。それは、これら裁判経験者の手記を見ても、また話を聞いても、よくうなずけるのだが今はそれを詳述している暇はない。

とにかく二時間ほどの間、単なる尋問じんもんなのか公判なのか、さっぱり分らぬ進行ぶり、ただがやがやとしているうちに終ってしまった。中国人の弁護士が、三人の主張を代弁してくれるはずなのだが、それもどうであつたのかよく分らない。

たと言葉は分らなくとも、通訳がいるのだから、通常の公判としての秩序が保たれていれば、およその見当はつくはずである。とにかく、何とも言いようのない裁判ではあつた。

十日ほどたつと、第二回目が開かれたのだが、この日も状況は似たりよつたりで、ただもう彼らどうしが互いに言い合っているうちに終ってしまった。もちろん三人の主張は、記事はただの創作であるということ、それに向井氏は負傷中で、前線にはいなかったこと等、弁護人を通じて強く主張したのであつた。いや、それは確認できないから、したはずであつたとしておこう。

結局三度みたびこうした法廷が開かれただけで、裁判は終りだという。後は一週間後に、判決が下さ

れるから、それを待つだけだというのである。

昭和二十二年十二月十八日、判決が言い渡された。向井敏明、野田毅、田中軍吉の三人全員が死刑であった。

四日の後、二十二日にはその判決文なるものが三人の手元に届けられたのだが、それには、

「百人斬りという残虐なる獸行によって、日本女性の関心を買おうとしたことは、現代人類史上聞いたことがない」

と、ある。武勇をたてて有名になり日本に帰ったおり、女性にもてようとしたのだということらしい。野田毅氏の手記によれば、

「これを読んで、思わず吹き出してしまった」

とあるのだが、これが結局死刑を言い渡すための骨子となっているのだから、とにかくいい加減であることは間違いない。

だがそれにしても、浅海一男氏がこんなよた記事を書きさえしなければ、南京大虐殺の犯人とする口実を、彼らに与えることはなかったのだ。とにかくその記事が唯一の証拠であり、起訴の口実となっているのだから。

こうして三人は、南京大虐殺の実行犯として死刑を宣告された。最高責任者としては、すでにこの年の四月処刑された第六師団長の谷寿夫氏がいる。これで南京大虐殺は、実際にあったこと

だと主張するお膳立てができたことになる。

しかし谷寿夫氏は、第六師団長である。それに属するのは田中軍吉氏一人であり、向井、野田両氏は十六師団所属である。こうしたところも、辻褄つじまは合っていない。とにかく、たとえまともな審査をしたとて、二度や三度の法廷で、いったいどれだけのことが分るといえるのか。ましてその一回一回があのと通りの運用である。そして三人とも死刑というのだから、これは法廷ではなく、まさに報復への儀式でしかなかった。

判決後も向井氏は、

「あの記事は創作であるということ、現在執筆した記者に証明してもらっている。間もなくそれらの書類が届くと思うので、それから上訴申弁書を提出する」

との申し立てを行なった。こうすれば、その間は刑の執行ができない。そして書類さえ届けば、無罪は証明される。

判決後、三人は死刑囚として他の人々と離され、別の房に移された。だが幸いにも、同じく収容されていた人々との面会や差し入れは許されたのであった。現在島根県におられる小西正明氏も、三人を最後まで励ましたお一人だが、特に小西氏は、浅海氏の証明書を早く送るようにと、成田に住む弟の向井猛氏に幾度も航空便を出していた。

当時は航空便の費用もままならず、小西氏は自分の持つていた背広を看守に売り、それでその費用を捻出していたのであった。憲兵であった小西氏は、私服も常備していたのである。また台湾出身者は、向井氏らの主張を入れた申弁書を書き、小西氏がそれを清書したりもした。

とにかく、同胞相援けるで、死刑判決後も皆で協力し、三人の死刑撤回を目指したのであった。そして時には、向井氏の好きな煙草や甘い物まで差し入れしたりと、背広を売った金は、こうして最後まで役にたったのであった。

そして、その待望の郵便物が着いたのである。皆は、思わず歓声をあげた。小西氏も万感の思いをこめ、その封を切ったのである。それは小西氏への返書という意味からか、宛名が小西氏の名になっていたからである。

しかし、その歓びは、たちまち打ち消されてしまった。それは、重要な「記事は創作であった」という字句がどこにもみられなかったからである。

「そんなはずはない」

と、幾度も読み直してみたが、やはり書いてはない。浅海一男と署名捺印なういんしたその証明書には、二人は人格高潔な将校であったとか、記事は向井、野田両氏から聞いて書いたが、その現場は見えないとか、すでに米軍によって不問に付された、等が書いてあるだけで、大事な創作の二字は書かれていないのであった。実弟猛氏の再三の頼みにもかかわらずついに浅海氏はそれを書い

てくれなかったのである。

しかし同封された、富山武雄大隊長が書いてくれた証明書には重みがあった。それにはこう記されていた。

一、向井少尉は、無錫で一度浅海記者と会っただけである。

二、その後十二月二日、砲弾によって脚および右手に盲貫弾片創を受け、看護班に収容され、十五日まで治療を受けていた。

三、向井少尉は聯隊砲指揮官であり、白兵戦に参加する機会などない。

(以上証明書の要約は鈴木明著『南京大虐殺のまぼろし』より)

これらは、かねてより向井氏自身が主張していたもので、もちろん書類にして提出もしていた。それを、事実であると証明してくれたのであった。

百人斬りをやったというその間、向井少尉は後方で手当を受けていたのである。そして隊に復帰したのは、南京陥落後の十五日であり、しかもその時も担架に乗せられての帰隊であった。

敵弾飛び交う紫金山の麓で、日本刀を見せながら百人斬りを語った、などというのは、これをもつてしても、明らかに事実ではないことが分る。

またこれはきわめて常識的なことだが、砲兵小隊長が白兵戦を演ずる機会などそう滅多にあるものではない。砲兵は兵隊ですら、満足に小銃も持っていない。ましてその指揮官が、奇襲でも

受けないかぎり、敵と直接渡りあうことはありえないのだ。それに野田氏とて同じで、大隊副官の野田少尉が、これまた接敵の機会などないことも明白である。副官は大隊長のそばにいて、その任を補佐しなければならぬのだ。

とにかくどれ一つをとってみても、浅海氏の記事が想像的に書かれたものであるかが分るのであるが、第一浅海氏自身、無錫から自動車で陥落後の南京へ入ったというのだから、第一線には出ていないのである。したがって戦闘中の紫金山山麓や、中山門付近には浅海氏が行っていないことは明らかで、それをさも敵前の取材で奮闘しているかの如く書こうとするから、こういう無理が生ずるのだ。

とにかくこの二通の証明書をつけ、向井、野田両氏は改めてその主張を盛った申弁書を出した。しかし中国側は、これらをすべて無視したのである。

この頃、東京ではすでに極東国際軍事裁判、つまり言うところの東京裁判は始まって一年の余、南京大虐殺も俎上そじょうに乗り、これによって裁かれるのは、南京戦の総司令官松井石根であり、また時の外相広田弘毅であった。

東京裁判においても、連合国側の主張である人道上の罪を糾弾きゅうたんするには、南京大虐殺は好個の例として最重要視されていた。これによって日本軍の残虐性を広く世界に示すことができれば、

それだけ連合国側の戦いは正義となるからだ。いわば、東京裁判の目玉商品なのだ。

だからこそ、国民政府当局は、その証拠となるべき被害者の証言を鋭意集めたのであった。だがそれでも市民の間から被害の申し出はいっこうに出てこない。やむなく当局は、係官を市中に出向かせ無理遣りにその証言を集めて廻った。

そしてそれらを元とし、第六師団長であつた谷寿夫中將を裁き、虐殺の命令者として処刑した。だがそれだけではいまだしと思つたのか、虐殺の実行者を処刑できれば、南京大虐殺はさらに現実性を帯びることになる。

そこで、眼をつけたのが、新聞に載つていた百人斬りの記事であつた。百人もの中国人を殺したとなれば、これは虐殺の実行者としてよき存在となる。だがこの記事によつても、これは戦闘としての行為であり、武勇伝として描かれている。したがつて虐殺実行者とするにはかなりの無理がある。

だからこそ一方的な裁判となつたのだが、ここで考えられることは、いかに虐殺を構築しようとしても、記事を書いた本人である浅海氏自身が、

「実は、あれは創作だった」

と、告白してしまえば、いかに強引な中国側とはいえ、あるいはこれを諦めたかもしれない。内外にそれを知られては、あまりにも虚構がすぎると見做されかねないからだ。

しかしその浅海一男氏は、創作だったということをとうとう告白しなかった。同じ房にいた多くの日本人も、それさえあれば助かると期待し、郵便物が到着するのを文字どおり鶴首していたにもかかわらず、浅海氏はその創作の一語をついに書かなかった。何故か。

誰もが、保身のためだと憤りいきどおをあらわにした。確かに、それ以外の理由は考えられない。しかし通常の場合ならともかく、今は二人の命がかかっているのである。

前線にも行かず、でっち上げの記事を送ったことがばれたら、もちろん面目丸潰れであり、また戦意昂揚のためとはいえ、こんな軍国調の文を書いていたことも、戦後になってみれば氣恥ずかしいということもあろう。

だが今は、そんなことは言っていられないのである。人の命がかかっているとあれば、誰だつて何をさし置いても創作だったと書くのが普通である。

だがそれでも書かなかつたとすると、単なる面目や立場の問題ではなさそうだ。それは、記事捏造となれば、その責任は向井氏たちから、今度は自分のほうに廻ってくるのではないか。その危険性は、わずかなものではあるが、可能性はある、そう感じ取つたのではないか。

その頃横浜のBC級戦犯の法廷では、捕虜を殴つた、食物を与えなかつた程度のことでも虐待とし次々と有罪になり、極刑になつた者も少なくない。事実無根であろうが、一度そう判定されたらそれを覆くつがえすことはできないのである。

東京本社にいた浅海氏が、その恐ろしさは充分に知っていたであろうことは容易に察しがつく。対米放送の女性アナウンサー東京ローズも、裁かれている。向井氏たちを処罰できなくなったら、その振りあげた拳こぶしのやり場に困る中国軍は、その鋒先ほざを自分に向けてきはしないか。そう思えば、それは恐ろしい。

しかしその可能性は、零と断定はできないまでも、きわめて少ないのだ。一方書かなければ向井、野田の両氏は確実に死刑になる。そして結局浅海氏は、書かなかつた。いや、書けなかつたのかもしれない。

昭和二十三年、一月二十八日、時折粉雪が舞う寒い朝であった。十時頃、房の中から大きな万歳の声が聞こえた。向井敏明、野田毅、田中軍吉の三氏が、唱えた最後の万歳であった。天皇陛下、大日本国、そして中国と三人は高らかに万歳を三唱した。

その声は、近くの房にいた他の日本人諸子の胸に、痛いほど突き刺さっていった。誰もが涙を流し、また改めて浅海氏の不実を思った。

向井氏はこの直前に、最後の書をしたためていた。それには、捕虜や住民を殺したことはないが、これをもって中国抗戦八年の苦杯と、その遺恨が流れ去り、日中親善、東洋平和の因となるなら、自分は喜んでその捨て石となろう。日本男子として、立派に中国の土になる。だが魂は、

大八洲おおやしまに帰る。死して護国の鬼とならん、と結んでいる。

またこれ以前にも、家族にあてた便りの中に、日本人には悪い人はいない。浅海氏にも書類を書いてくれた礼を伝えてくれ、と記しているのだ。十一時、三人は南京の南にある、かつての激戦地雨花台に連れていかれた。そして、正十二時激しい銃声があたりにこだました。

こうして三人は南京郊外雨花台において、その若き命を散らせたのであった。向井氏はこの時三十六歳、野田氏三十五歳であった。また中佐であった田中氏は四十三歳であった。

なお田中軍吉氏の罪は、中国人民を三百人も斬ったというもので、その証拠品として提出されたのが、氏の軍刀を写した一枚の写真であった。この写真は、当時出版された山中峯太郎編になる「皇兵」という本に収録されているもので、なるほどそれには、

「悲願三百人斬田中軍吉大尉の愛刀助広」

という説明が、つけられている。

だがこれは、戦場で多くの敵を斬る、つまり活躍してほしいという願いをこめて、周囲の人がつけたもので、言うなれば武運長久と同じような意味あいのものだ。にもかかわらずこれをもつて、市民の虐殺にするなど、どう考えても、これもただの言いがかりとしか思えない。

そして中華門から突入し、城内でこの大虐殺を働いたというのだが、田中大尉の属する鹿児島

四十五聯隊は、第六師団のところで詳述したとおり、城内には一步も足を踏み入れていない。とにかく、いずれの罪状もまったく兇戯じぎに等しい内容でしかないのだが、それでも無理遣やりこうして極刑を課していったのである。

田中軍吉氏は、戦後復員し東京に在ったのだが、たまたま近くにいた第三人から思わぬ逆恨みを買ひ、この三百人斬りの写真を元に、戦犯として訴えられたのだという。そしてそれを、そのまま中国側がとりあげたのであった。

その逆恨みというのは、借金の申し入れを断つたためというのだから、これまた何をか言わんやである。いかに終戦直後という特殊な世相とはいえ、まことにお気の毒としか言いようがない。

二 その娘さんのたどった道

厳しい寒さも和らぎ、やがて春となった。その頃、山口県神代村の向井家に、質素な紙に包まれた一房の髪と、わずかばかりの爪が届けられた。南京の戦犯収容所を釈放された一人が、復員の途中に届けてくれたのであった。

向井氏の実家には敏明氏の母ふでさんと、若い二人の娘さんが住んでいた。亡くなった前妻との間にできた子で、中学と小学校とに入ったばかりであった。年老いた母が、その届けられた遺髪と爪を、どんな思いで受け取ったことか。

そしてその悲しみに加え、敏明氏からの送金も絶たれたため一家は故郷の家をたたみ猛氏と親族の家とに、分散して預けられることになった。猛氏は千葉県成田に住んでいたが、そこには老母と幼い次女千恵子が預けられた。だがそれもしばし、やがて仕事に失敗した猛氏は家を手放したため、老母と幼い千恵子さんの二人は市営住宅で独自の生活をしなければならなくなった。昭和の二十年代、老母と幼な子二人の生活がどんなに厳しいものであったか、とにかく大の男

でも、その日の食にありつくのがやっとという時代なのである。

そんな老母のところへ、わざわざ鹿児島から野田毅氏のこれも年老いた父親が尋ねて来た。怒りのやり場に窮した老爺は、せめてそれを口にできる相手を求め、はるばると上京したのである。戦死なら、諦めもつくだろう。しかし、ありもせぬことを書かれて、それがために処刑されたなどということとは、親の身となつたらとても諦めきれるものではない。しかもやっと生き残つて復員し、平和な生活が始まつていた矢先だけに、その無念さは言いしれぬものがあつたに違いない。しかし老母は、

「日本人に悪い人はいない。浅海氏にも証明書のことで礼を言つて下さい」

という遺書の心を尊重してか、浅海氏にたいしての恨みつらみは一語たりとも漏らさなかつた。この時次女の千恵子さんは小学校の二年生で、まだすべてを解する齡ではなかつたが、しかし年とともに、「戦犯の子」と陰口を言われるようになっていた。戦犯は人殺しをした悪い人、とでも言いたいのだろうか。それは大人が言っているのを、子供がそのまま真似しているだけで、子供に罪はないのだが。

こうした世間の冷たい眼と、貧しさの中で老母と孫は生きていったのだが、それでも老母はその苦しい中を針仕事で貯めた金なのか、孫を高校に進学させたのである。それというのも、

「孫たちを頼みます」

という我が子敏明の遺書に、支えられてのことであつた。

お陰で千恵子さんは高校を終え、就職もし、そして結婚もできるようになった。そして浅海氏の心なき記事によつて、悲惨な十年二十年を送つた向井家にも、ようやくその災は遠のいたかに見えたのであつた。他家に預けられた姉娘も、同じように労苦を重ねながらも結婚していたのである。だがその災は、いまだ過去のものとはなつてくれなかつた。

それは、朝日の本多勝一記者が、突然百人斬りの記事を再び朝日新聞に書いたことから始まる。しかもそれは、戦闘中の武勇談からさらに脚色され、平時における中国人虐殺のほうへと一歩大きく踏みだした書き方であつた。

その表現は、尻尾を擱まれぬよう他人の発言とするなど配慮はしてあるものの、とにかく一般市民虐殺の印象を強く与えるものであることは確かなのである。そしてそれを本にして出版したのであつた。根もない浮草に、無理遣り花を咲かせたようなものである。

二人の子を抱え、幸せに暮らしていた千恵子さんは、ある日突然夫からその本を見せられた。いや、突きつけられたのである。

「人を殺すなんて、どう考えても悪いことに決まっている」

夫は、そう突き放すように言つた。結婚する前から、父敏明氏のことは話してあつたし、すべ

て分つてくれているものと信じていた千恵子さんにとって、これは大変衝撃的なことであつた。すぐそれを読み、そして説明していったのだが、夫はどうしても理解してくれない。

千恵子さんも根気よく、何度も記事の不条理を説いたのだが、夫はその言葉より記事のほうを信じているようで、妻の言葉には耳をかさうとしないのである。そしてついには、

「お前は結局、人殺しの娘なんだ」

と、はき捨てるように言つた。幸せな生活は、ここからがらと音をたてて崩れていった。戦争というものをあまりにも知らないということと、軍人性悪説とを教育された世代の悲劇としか言いようがないのだが。

一人の心なき記者の書いたものが、二人の人間を死に追いやつただけではなく、その老母と孫をいつまでもこうして苦しめていく。千恵子さんの姉は、本多氏の記事を読んで精神的に大きな衝撃を受け、腕が動かなくなるという症状におちいつてしまった。そのほか敏明氏の後妻となつた女性も、またその子供も、そして野田家の人々も、またまた酷い苦汁を飲まされたのである。事実なら何と言われても仕方ないが、話はまったく逆で被害者は向井氏たちなのである。

「日中友好の捨て石となる、と言つて死んでいった父です。それなのに、こう何度も引きずり出され、鞭打たれるのでは、父は浮かばれません。しかも信じていた、同じ日本人にそれをされるのですから」

と言う千恵子さんの言葉は、その同じ日本人の一人として決して決して人事ではない。その上、悪逆無道の人間として写真まで使われているのだ。これでは向井氏の崇高な心は、確かに宙に浮いてしまう。第一千恵子さんのみならず、遺族の方々の心情を思うとかけるべき言葉もない。

三 進歩的文化人という人々の文化革命論

浅海一男氏は、その後も毎日新聞を代表する記者として遇され、名誉職員となり著作も幾つか出されているという。私もつい興味を抱き、そのうちの一冊『新中国の入門』という本を手に入れ、読んでみたのである。

あれだけ軍国調の記事を書いてきた浅海氏が、敗戦後はいったいどんな記事を書いているのだろうか、と思ったからである。だがそれをさらっと読んで、思わず唖^{うな}ってしまった。何と今度は一転して、新中国と共産党を讚美する言辞で、見事に埋め尽くされているからであつた。

「新中国は全世界の被圧迫人民、民族を励ますという崇高な目的を持っている」
だから中国が核実験をするのは当然で、それは、

「他国の核兵器を使えなくし、終局的にはそれらを消滅させる為の兵器」

であり、米帝国の核は悪いが、中国共産党が核兵器を持つのは正しいという。そしてさらには、「文化大革命こそ、さらに理想的な社会主義国家を建設するための正統な革命である」と、文

化革命と毛沢東を絶賛しているのだ。数百万の人が意味もなく殺されていったという、文化大革命だが、それが浅海氏には天の啓示のような、素晴らしいものに見えたのであろうか。そしてその一方で、手ひどく批判されているのは、

「日本帝国主義の中国侵略」

である。しかし侵略と言うならば、いかに従軍記者とはいえ、軍とともに行動し好戦的な記事を書きまくった浅海氏自身も、その侵略者の一人ではなかったのか。そんなことはまるでなかったかのように、あるいは人事のように日本軍の凶暴性を強調しているが、浅海氏とて、少なくともその片棒を担いだ人間ではなかったのか。

南京戦に従軍した百二十数名の特派員のうち、戦後になって、

「南京大虐殺は実在した」

と言いだした人が三人いるのだが、その内の一人が浅海氏であった。だが、その謎もこれで解けたようだ。そしていわゆる進歩的文化人の、一つの典型をここに見る思いがしたのである。

しかし、この文化革命なるものを礼讃したのはひとり浅海氏のみではない。浅海氏は毎日だが、朝日のほうはそれこそ人類の叡智でもあるかのように書きたてていったのは、多くの読者が知っていたとおりである。またこれに追従する、いわゆる進歩的文化人とやらも多かつたはずだ。

しかし皮肉なことに、それほど讚美してやまぬ文化革命も日ならずして否定され、今度は一転

して犯罪ときめつけられ裁きを受ける羽目になった。江青ら四人組を筆頭に死刑から無期など、断罪と粛清の嵐が吹き荒れていったのだが、それでは、日本の文革礼讃の人々はどうかであったか。まさか断罪されることはないにしても、せめてその非を認め、

「今までの論調に誤りがあった。申し訳ない」

の一言くらいあつて然るべきであろう。でなければ、現在の中国政府を間違いと否定するか、そのどちらかでなければならぬはずだ。

この文化大革命の酷さは、だいぶ知られてはきたが、とにかく西蔵チベット一つ見ても、寺は壊され経文は焼かれた。そして多くの人が殺され、その上佛画を踏み絵にまで使ったというのだが、こうした文化の破壊がいったい何の革命になるというのか。

当時ネパールで命からがら亡命してきたチベット人に会ったことがあるが、同じ佛教をこよなく愛する人間の一人として、深い同情の念を禁じえなかったのを思い起こす。

現在、印度に亡命中のダライ・ラマは、西蔵チベットの独立とその平和的達成を主張し続け、ノーベル平和賞を受けたのは周知のとおりだが、そのダライ・ラマは、

「中国の侵略以来、百万のチベット人が殺害された」

と、言っている。その数値が正確であるか否かはともかく、それに近い犠牲者が出たことだけは確かであろう。

そしてなお中国本土では、文革中の十年間に六百万余の犠牲者が出たという。これは外国紙の報道だが、日本の新聞はこういう記事はまずもって報道しない。たとえ報じても、紙面の片隅に小さく載る程度だから、ほとんど人眼を惹くことがない。せいぜい雑誌が、これら外国紙の記事をとりあげるくらいである。

だがその一方で、米軍によるものは、ベトナムのソンミ村で三百人もが虐殺されたとして、くり返し幾度も報ぜられる。そして、その人道上の罪もさまざまな形で追及していく。

ところがカンボジアでは、ポルポト派という共産軍によって、百万から三百万というこれまた大量の虐殺があった。これはもはや隠しようのない事実として報ぜられているのだが、それでも人道上の問題として追及しようとする動きなどまったくない。

罪もない住民をこれだけ多数殺害しても、ポルポト軍にたいする非難の声は、日本ではさっぱり聞かれないのである。反戦運動家なる人々も、黙して語らずである。それは、ポルポト軍が中国に支援された共産軍だからなのだろうか。

このように、現在でもなおかつ一つの流れ、つまり報道への傾向性というものがあるのだが、人道上の罪を追及するということで南京大虐殺を追及するというのなら、同じ年に起きた通州事件なども当然とりあげるべきなのだ。

それは、蘆溝橋事件ろくこうきょうが起きたその直後のことであつた。北京郊外の通州という街で、日本の軍

人数人と、婦女子を多く含む邦人二百六十人が、ことごとく惨殺された事件である。しかもその惨状は、形容しがたいものであった。

それでも日本の新聞は、この事件に関してはほとんど触れていない。あるいは、私が見落としているのだろうか。とにかく日本の報道がいかに偏っているかということだが、こうして五十年、今や日本人の多くはかなりの程度洗脳されてしまった。それが世界の常識と、日本の常識との差になって現れている、と言えよう。

結局あの文化革命なるものは、単なる権力闘争にすぎなかったのだが、日本の支持者はそんな実情も分らず、ただ右往左往させられているうちに結論が出てしまったということだ。とにかく、どんな思想でも、本当に信ずるならそれもまたよし。それに殉ずるのも結構だ。だがその時々、ただ迎合するだけとあつてはいただけない。まして公正な報道という名のもとに、かほどまでに偏向し、一方的な報道をするとはもはや犯罪に近い、と言わざるをえない。

ただ浅海氏はすでに故人となられているだけに、死者に鞭打つようで恐縮だが、虐殺を否定するためにはお許しいただきたい。

とにかく、浅海氏の場合その筆によって二人もの命が断たれているのだ。これは事情のいかんにかかわらず、大きな心の負担となることは間違いない。だからこそ、南京大虐殺を主張したり、

文革礼讃をやつたりと、一つの突つ走りをしないと、じつとしておれなかったのかもしれない。

人間は本来素晴らしいものだ、心麗しきものだと思つてゐることからすれば、そう思わざるをえないのだが、ただちよつとした横着と見栄と、そして誰もが持つ卑劣さに打ち負けると、人間思わぬ方向へ行つてしまうものだ。まこと、人事ならぬ思いではある。

遺族の千恵子さんにも、ふとそんな話をしたのだが、これだけ手酷い仕打ちをマスコミから何度も受けている千恵子さんにとって、それは何の慰めにもならなかつたかもしれぬが。

なお千恵子さんは、七年ほど前に父を失つた慟哭の思いと、もう私たちをいじめないで下さい、という趣旨の一文をある雑誌に寄せている。そしてその後、再び父処刑の地雨花台を訪れている。彼女にとっては、そこが永遠に忘れえぬ地、となつてゐるのだ。

そしてその近くの江東門には、虐殺記念館が建ち、そこには今もつて向井、野田両氏が並んだ写真が、虐殺犯人という説明付きで飾られている。これも、彼女にとつてはたまらぬものの一つである。いづれにしても報道や記事というものは、いつでも凶器になり得るということを、ここでも痛烈に思い知らされるのだが、同時にそれを常に批判できる機関も、必要だということを痛感せざるをえない。

とにかく、マスコミの実態なるものを、もつともつと国民は知る必要がある。



第九章 虐殺話のそもそもの源

一 陥落当りの外電記事

南京陥落当時、ニューヨーク・タイムズのダーデン記者は、車で市中をかけずり廻つて取材した。このことは日本の報道関係者も、また将兵も目撃しているが、それだけに彼はかなり多量の報道記事を流している。真贋入り混ざつてはいるが。

挹江門ゆきかうにおける中国軍脱出時の悲惨さを報じたのも、すでに紹介したとおりだが、その他中国兵による放火掠奪のすさまじさなども、ずばりそのもので、なかなか有能な記者との印象を受ける。それだけに、便衣兵処刑に関してもいち早くこれを捉え、

「およそ二万人の中国兵が処刑されたこともあり得る」

と、断定ではなく推測記事ではあるが、そう伝えている。もちろん実数よりはるかに多く、その十倍近いものだが、彼も反日感情を抱く米国人であることを思えば、一応得心がゆく。そして重要なことは、彼の記事にも一般市民の虐殺報道は一言半句も見られないということだ。やはりダーデンも、市民と便衣兵とは区別しているのが分る。やはり命がけの取材をする記者だけに、

その点は正確である。

ところが、南京には一步も足を踏み入れず、安全な上海に身を置きながら、流れてくる風聞だけを頼りに記事を書いていた記者たちが、かなりいたのである。その風聞というのは、難民区の国際委員会の面々が、中国人の申し出を検証もせずにタイプしていった書類やら、ただの噂話などであったが、すでに触れたとおり、事実とはほど遠いものであることは、当時の南京総領事館の福田篤泰氏が明言しているとおりでである。

そして、それらの反日的な手記や噂話をまとめ、一冊の本にしたのがマンチェスター・ガーディアン^{イアン}の記者ティンパリーであった。それは「外国人の見た日本軍の暴行」という書だが、題名からしてその内容もおよその見当はつくと思うが、実際読むに耐えない、酷い記事で埋めつくされている。

中でも気になるのは、冒頭^{ぼうとう}の部分で、

「華中戦区における中国軍の死傷は少なくとも三十万で、良民の死傷もまたおそらく同数くらいであったと思われる」

という件^{くだり}だが、いかにも確信なさそうな書きかたではあるが、ここに初めて一般市民三十万死傷を文字にしたのである。だがこれは、上海戦から南京にいたる間のこととし、しかも戦火によ

る巻きぞえという主張のようだ。しかし上海から南京への追撃戦では、一般市民の姿はほとんど見られず、そのような犠牲者が三十万もいるはずがない。

とにかく酷い内容のものだが、福田篤泰氏の言をまつまでもなく、被害話は大きくなるものだし、また伝聞というのものも、転がる度に話は大きくなっていくのも常である。第一中国人の表現そのものが、何事においても大袈裟であることは常識のようなもので、数なら十倍、百倍にしないとおさまらないのだ。

これらのことは、上海にいる記者なら当然心得ていることだが、ティンパリーはそれでもこの本を出版したのである。そして国民党政府はただちにこの本をとりあげ、漢訳して広く中国全土に頒布したのであった。つまり反日抗日の宣伝書となったのである。

中国側が情報戦を重視していることはすでに触れたが、この場合、原著が中立国の英国人であることが効果的だと判断したのかもしれない。中国はこの時交戦中であるから、どのような反日宣伝の書を出したとて、少しも不思議はないのだが、この本は原著からしてすでに反日宣伝の書になっっている。

それは、英米などの諸国が中立と言いながら、実際には援蔣反日であったから、これまた当然と言えば言えるのだが、ただ一応中立の立場をとり、しかも報道という枠を守っているかのように見せているところが、いかにも不公正である。

だが注目すべきは、これだけ反日を強硬に示しながら、いわゆる南京大虐殺などというものは出てこないということだ。ただ漠然と、上海から南京という広大な地域で、良民が死んだかもしれないという、及び腰ながらの想定をしているだけなのである。

しかしながら、今にして思えば、原著が一応中立的立場にあるはずの英誌の報道ということであれば、これだけ事実を反することを書かれたら、やはり抗議をし修正をしておくべきであった。おそらくこの本が出された昭和十三年当時、外務省や報道関係者の一部は、その内容についても知っていたに違いない。現に同盟通信の上海支局長であった松本重治氏は、同じ上海の記者仲間として交遊のあったティンパーリー本人から反戦の書として出版すると聞かされているし、その後この本を読んでもいる。だがあまりにも酷い内容なので、途中で読むのを止めてしまったという。

この辺の消息は、松本氏の回想録『上海時代』に詳しいが、とにかく日本人は、このような酷い記事を書かれても、これにたいし抗議し、修正しようという発想にはいたらない。

これは現在でもそうだが、とかく日本人は国際的な非難にたいし反論するという習慣がない。そうしたことは潔しとせず、という気風があるのか、とにかく腹の中では怒りを覚えても大方は黙して語らずである。

しかし欧米人には、そうした習性がないから、

「事実だから、黙っているのだろうか」

と、受けとめる。そして悪いことには、そうした雰囲気の中からは、さらにそれに輪をかけた中傷やら非難やらが生まれてくることだ。何を書いても反論しなとなれば、そうなるのも無理はない。果たせるかな、これら上海発のいい加減な記事を土台にして、対日非難ここに極まれりというような珍妙な本が出された。二年後の昭和十六年のことである。

それは、エドガー・スノーという記者による『アジアの戦争』という本だったのである。彼は満洲事変の頃から中国を取材し、この後さらに「中国の赤い星」という中国共産党の探訪記事を出し、中国通の記者として知られていく。

では、その『アジアの戦争』の内容を見てみよう。

イゴロット人は爆撃機など持っていないからいいものの、この軍隊は首狩時代の伝統を残しながら近代医学の技術と戦争科学をマスターしている。しかもこれは多かれ少なかれ、日本の社会全体について真実である。心は種々の神々、迷信、タブー、神仏崇拜といった愚かな封建の世界に生きていながら、その手で近代的機械を動かしているのだ。

イゴロット人というのは、フィリッピンの山中に住む首狩族のことだが、その首狩の野蛮な風習を縷々述べた後で、そういう民族がある程度の科学を身につけたのが日本人であり、日本軍だということである。しかもそれは軍隊だけではなく、日本の社会全体が野蛮なのだという。さらに続けよう。

この世界のいずこにおいても日本の軍隊ほど人間の墮落した姿を念入りに、そして全く組織的に暴露しているものはないということは、否定しようにもすることのできぬ事実なのである。ジャングルの野獣とても、飢えた時か攻撃された時でない限り相手を殺さないのが常道だ。

日本軍の行動と聖業の理由を更に深く掘り下げると、そこには日本人の不断に悩んでいる劣等意識があらわれる。その一部は根深い歴史的な根柢のあるもので、(中略)

朝鮮人と中国人に、知的にも肉体的にも、個人的に劣っているのを潜在的に感じているのである。そこで日本人は永久にその代償を求めんとしているわけである。であるから、ある日本人にとっては、聳え立つような中国農民を銃剣をもって躪つまずかせること以上に大きな満足を与えるものはないのである。(中略)

日本武士の手柄の一つに、秀吉の朝鮮征伐がある。勝ち誇った軍隊はその時三万に及ぶ塩

漬けの鼻と耳とを持ち帰り、京都の皇室の考えを教化した。

日本軍と、日本人にたいするこき下ろしはさらに続く。

主人は女ども——日本の社会階級において最低の生きものであり、家の主人が商業的に売買できる生きもの——により進行される。更に、もし天皇のために死ねば国民的な英雄神になり、自動的に過去の武神たちと並ぶ神道の殿堂に入る。この信仰を子供が言葉聞き分けるようになった時から教えると、ここに現代日本兵士が得られるわけだ。それはちようど、パパア人が人食いを栄えあるものにするこゝによつて第一級の人食人間たるを得るようなものである。

哀れな日本の女性は男性の要求に応じてその貞節を犠牲にせねばならないのだ。中国の女などに思いやりをすることはないというわけだ。それどころか、大きな名譽を与えているくらの考えである。女は日本では商品であり、その売り買ひは、この国家の大きな産業のひとつである。一九三一年、日本軍が極東にパラダイスを建設し始めた時、公式の政府統計によると日本の病院では毎日百二万三千九百十四人の公娼が治療中であると発表されている。強姦も上から奨励される。日本の女性は品物であり、数百万人の女の値段も市場では同じ

重さの牛肉の価にもならぬ。

こうなつてくると、とてもまともに読む気にはなれないが、要するに、強烈な人種差別の意識がまずあつて、その上さらに反日感情が働いているのだから、はじめから記事は当然歪んでくるのだが、それでも、もう少し日本を知っていたら、あるいは学んでいたら、同じこき下ろすにしても、こうも次元の低い内容にはならなかつたに違いない。とにかく、あまりにも日本を知らなすぎるし、幼稚すぎる。

それというのも、結局は日本を軽蔑しきっているからこそ、このような言いたい放題な記事が書けるのであつて、首狩族云々から女性のこと、そして靖国神社にいたるまで、これほど一民族と国家を侮辱した記事を書かれ、よく日本人は黙っていたものよと不思議な気すらしてくる。

おそらく他の国であつたら、決して黙つてはいないであろう。それは新聞や雑誌、あるいは単行本の影響力というものにそれほど思いをいたさなかつたということもあろう。では一般的日本人批判はこのくらいにして、次に南京でのことに移ろう。

いやしくも女である限り、十歳から七十歳までの者はすべて強姦された。難民は泥酔した兵士にしばしば銃剣で刺し殺された。母親は赤ん坊の頸が切られるのを見た上で強姦を受け

ねばならぬことがしばしばであった。或る母親は一軍人に犯された時のことを次のように語った。その男は赤ん坊の泣声に痲癩を起し、その頭に蒲団をかぶせて窒息死させた上で、やすやすと自分の目的を達したというのである。こういつた暴行を指揮した若干の士官は自分の宿所をハレムと化し、夜毎に新しい捕虜と床を共にした。白昼公然たる性交も不思議でなかった。約五万に上るこの町の軍隊は、一ヶ月以上にわたって、近世においては匹敵するものがない強姦、虐殺、略奪、といったあらゆる淫乱の坩堝るつぼをおよいでいた。

ある外人の傍觀者は次のように書いている。事実アメリカ、イギリス、ドイツの大公使館員の住宅、大半の外人財産を始めとする市中の建物は、どれも再三日本軍人の略奪を受けた。あらゆる種類の乗物、食糧、衣類、夜具、貨幣、時計、絨毯や絵画の類、種々の貴重品がその主なものであった。たいていの商店は手当り次第の押込みや窃盜を受けた後、トラックを使う集団をなした兵士の組織的略奪を受けた。これは士官の命令で行われることもたびたびであった。

一万二千戸の商店と家屋は貯藏品や家具を全部略奪され、それから放火された。市民は動産の一切を失った。日本軍の兵士や士官は誰も彼も自動車や人力車をはじめ運搬に使える物ならなんでも盗み、この略奪品を上海へと運ぼうとした。外国外交官の家庭も侵入を受けた。そして使用人が殺された。兵卒は思うままに振舞い、士官も進んで加わった。

とにかく読むにたえない内容だから、この程度で打ち切ることにするが、しかしこれを読んだ欧米人として、

「各国の公館にこのような狼藉ろうぜきを働いたら、それこそ戦争になるだろうに」

くらいの疑念は、抱いたに違いない。書いた本人も、読者がそこに気づくくらいのは当然承知していたであろうが、それでもなおかつ平気で書くという神経は相当なものである。

この、『アジアの戦争』という本が出されたのが、南京戦終了後三年たった昭和十六年の春であり、日米関係は緊迫の度を深めつつあった。そういう大事な時に、ありもせぬことを書きたてて、反日感情をいたずらに煽あおりたてることは、日米両国民にとつて大変不幸なことである。それはその後の日米戦において数百万の人命が失われたことを思えば、一人の心なき記者の書いた低俗な記事とはいえ、その責任は重大である。

だがここまでは、日本人ならこれをまともに受けとめる人もいないだろうし、むしろ噴飯ふんぱんものとして片付けることもできるが、ただ次の一点だけは見逃せない。

南京国際救済委員会の委員が私に示した算定によると、日本軍は南京だけで少なくとも四万二千人を虐殺した。しかもこの大部分は婦人子供だったのである。また、上海・南京間の進撃中に、三十万人の人民が日本軍に殺されたと見積もられているが、これは中国軍の受け

た死傷者とほぼ同数であった。

だが国際委員会が、このようなことを発表した事實はまったくくない。にもかかわらず準公的機関とも言うべき委員会の名を勝手に流用し、四万二千とか三十万という数まであげ、一般市民の虐殺を書きあげるなど、きわめて悪質である。いかに日本憎しの感情があつたとて、記者として、こうした行為はどうてい許さるべきではない。

記された数字の元は、いずれもティンパリーがただの風聞を書いたにすぎないのだが、ここでは風の便りなどというものではなく、ほぼ断定的な表現に変っている。戦火による巻きぞえ的な死傷は「殺された」になり、おそらく、とか、くらいであつたと思われる、は「見積もられている」と、いかにも事実であつたかのような断定的書きかたになつている。

だいたい人の噂話というのはこんなもので、転がる度に大きくなり、あやふやな想定が事實となつて一人歩きしていくものだ。しかし日本人というのは人が良いのか、遠慮深いのか、これだけ名譽を傷つけられても、なおかつ黙っていたのである。

ところが、五年後の東京裁判において、結局はこれが南京事件を提起させる元となつていたのである。

二 東京裁判

昭和二十年八月十五日、敗戦。

それから半年たった翌二十一年二月に、中国側は突如として南京事件犯罪調査書なるものを発表した。それには、殺害三十四万人、焼失破壊家屋四千余戸などと記されている。ここに中国側の南京事件主張が始まったのだが、実はこの正月、戦勝国側は極東国際軍事裁判、つまり東京裁判を開催すると正式に決定しているのだ。

そしてその直後にこの南京事件の犯罪調査書が出されたのだが、これは決して偶然ではない。この機に合わせ急ぎ作られたもので、その狙いは明らかに日本軍の残虐性と不法性を強調するためのものであった。それができれば、それだけ連合国側の戦いは正義の戦いとなるからだ。

まさに、それを明確に浮き彫りさせんがための目玉商品として、南京事件が登場してきたのだが、ここで考えねばならないのは、支那事変は八年もの長きにわたって戦われている。南京戦の他にも、上海の攻防戦もより激しいものであったし、それ以後にも徐州大会戦、漢口作戦、南昌

作戦と大きな戦は幾つも戦われている。

にもかかわらず、それらの会戦では不祥事がまったく起きず、南京作戦だけがどうして三十四万もの虐殺があったというのか。別の軍隊が戦ったわけではないのだ。

それはいみじくも、南京事件を思いつくそもその元が、実はエドガー・スノーの『アジアの戦争』にあったということを物語っている。

人間何かを主張する時に、それなりの據りどころがなければできないもので、第一ここでは、スノーの記事にある三十万と四万二千という数字が、そのまま使われていることに留意すべきである。この元がなければ、市民三十四万人の虐殺、などということは思いつくことすらなかったであろう。

まして中国は、以前から写真を捏造してまで、巧みに宣伝戦をくり展げてきたお国柄であるし、また連合国側としても、是非とも欲しいものであったという事情もあり、この記事の立件化を考えても、少しも不思議はない。

だがその立件化には、虐殺の実行者がいなければならぬ。そこでまず南京法廷で谷寿夫氏、向井氏ら四人をその実行者として処断したのだが、しかしこれがいかに無理なこじつけであったかは、すでに詳述したとおりである。ただその内容を知らぬ人は、実行者が処刑されたという事実だけで、本当にあった事件だと印象づけられていくところが実は恐ろしいのだが。

それはともかく、東京裁判ではそれら不法行為を立証するための証人が、次々と登場する。南京アメリカ教会のジョン・マギー牧師は、こう証言していく。

「いたるところで、組織的な殺戮きつくが行なわれ、しばらくすると南京市内のいたるところに死骸がごろごろ横たわっていました。強姦も、いたるところで行なわれ、もし拒絶や反抗などしたら、すぐ突き殺されました」

ティンパリーやスノーの記事にあるような虐殺証言を微に入り細をうがち、これでもか、これでもかというように、延々二日間にわたってマギー師は証言したのである。

これにたいし、ブルック弁護士は最後にこう質問した。

「それではお聞きしますが、これらのことはあなたがその眼ではつきりと見たのですか？」

「いえ、私がいかに見たのは、誰たれかされて逃げたところを射たれた、その一人だけでした」

何のことはない、証言といいながら、そのすべてがどこかで仕入れてきた、また聞きにすぎなかったのである。

警備の兵が、突然人影を認めれば「誰だ！」と大声で聞く。三度声をかけ、返答なければ射つ。もちろん、逃げる場合も射つ。そんなことは分りきったことで、残虐行為でもなければ不法行為でもない。

それに、市内は虐殺の屍体で埋めつくされていたというのもおさまりの風聞で、実際には挾江ゆうこう

門付近に同士討ちの戦死体が、ここには折り重なって残されていたが、あとはどこも綺麗な街並みがあるのみであった。これは、すでに多くの証言で明らかにしたとおりである。

それにしても、あの狭い南京市内で三十四万もの人が殺されたという証人でありながら、その市内にいた人間が、実際には殺人を見てもいいなし、累々たる屍体^{るる}どころか一つの屍体をも見えないというのだ。これで、大虐殺の証人と言えるのだろうか。

ただ最後の質問には、正直に答えるところなど、さすがに牧師さんだと言えるが、この一言で長い証言もふいになってしまったわけだ。

続いて南京大学のベイツ教授が、証人台に立った。

「日本軍は、毎日強姦の相手を求め、集団で街中を歩き廻りました。南京神学院では、友人の見ている前で、一婦人が十七人の兵によって強姦されました。大学の構内だけでも、九歳の児から七十六歳の老婆まで強姦されたこともつけ加えておきます。こうして占領後の一ヶ月間に二万件の強姦事件があったと、ラーベ氏たちは報告していますが、私は内輪に八千と見積りました」
「気狂いじみた残酷な事件と言いながら、その友人は終始その恐ろしい現場にいて、兵の数を一人二人と十七人まで数えていったのだろうか。」

ともかく、ここでも同じような残酷性強調の証言が続いたが、九、十歳から七十歳の老婆まで

の強姦というのもそうだが、これまたスノーの記事を思い起こすような話ではある。このように、この頃から虐殺証言には、何か一つの型のようなものができつつあるようだ。

だが、他の地域で行なわれた戦犯裁判と違うのは、良心的な米英人の弁護人がつけられたことで、これらの人々の中には職務に忠実であったためか、突然解雇されるという事態まで出現したのだが、これも東京裁判の方針をよく物語っているといえよう。

とにかく証言たるや、まことに残忍この上なく、信じがたいような話ばかりだったが、加えて十七通にも及ぶ宣誓口述書なるものが提出された。これは、南京で急遽作られた被害者の弁とも言うべきものだが、これについてはすでに述べたとおり、いくら公募しても集まらず、やむなく係官が市中に出向き、無理遣り作ったものである。

そして、これらの証言や口述書と多数の証拠書類と称されるものは、そのまま証拠として採用された。つまり事実だとの認定である。だいたい、どこの誰なのか、あるいは本当に実在するかどうかも分らぬ人間の被害調査を、確認もせずそのまま証拠として採用するなどいかに乱暴で、これではもう何でもいいから出せというに等しい。たいするに、日本人の証言は、

「信用するに足らず」

として、あっさりとすべてが却下されたのである。それは当時南京に在った参謀、中山寧人氏ら三人の、そのような事実はない、との反論であったが、その主張はまったく無視されたのであ

った。

この他、許伝音氏ら中国人三人を含む七氏が、次々と証言台に立ったのだが、いずれもその内容は大同小異、その残虐性を強調するためのものであった。そして同時に、提出された口述書なるものも、検証も反対尋問もないままに、証拠として採用されたのである。これにたいし弁護士は、

「針小棒大な宣伝文句であり、小説的な物語りでしかない」

と反論したが、これもまったく無視であった。

これでは、松井石根、広田弘毅の二人が有罪になるのは当然で、これが正義と文明の名のもとに裁かれた東京裁判の実態であった。まさに勝者による敗者への裁きである。

もつとも二年前まで、互いに憎悪をむき出しにして戦ってきた両者であれば、これまた致しかたなしと諦めるほかないのだが、ただ法に照らしとか、正義をふりかざすところに問題がある。

なおここでもう一つ知っておかねばならぬことがある。それは南京事件を思いつくその元には、スノーたちの記事だけではなく、さらにいま一つ、もっと深い歴史的な背景があったということである。

それを指摘するのは、弁護人の一人であり、歴史学者でもある滝川政次郎氏だが、氏によれば

中国では城が落ちるということは、すなわちそのまま城内の人間は一人残らず殺されることだ、
というのである。

それを屠城とじゆうと言ひ、三百年ほど前の揚州でも、清軍によつて城内は皆殺しにあつてゐる。その
凄惨な様は、「揚州二日半」という禁書でも伝えられているが、これは揚州のみならず、中国各
地であつたことだといふ。

その残虐さは、殺しかたから食肉習慣にいたるまで、実に形容しがたい残酷なもので、日本人
には少々刺戟しげきが強すぎる。

「何故、あのような残虐証言が次々と出てくるのか？」

という疑念も、これで少しは解ける気がするのだが、とにかく民衆の心の中に、こうした知識
が常識としてあるなら、反日感情とともにそれが残虐な噂話となつて流れ出るのも無理はない。
そしてそれが外国人記者の耳にも入り、記事となり証言となる。

長い歴史が育はぐんだ潜在的な記憶というものが、一気に噴き出してきた、との印象が深いのだが、
この滝川氏の言は、田中正明氏の『南京事件の総括』と富士信夫氏の『私の見た東京裁判』の二
著に、滝川氏の本の引用やら、氏から直接聞いた話などが詳しく紹介されているので、ここでも
ほんの一齣ひととまではあるが、紹介した次第だ。

それらはともかく、これら証言や口述書にたいし、パール判事は、

「これら証人の陳述は、その証拠を曲解と誇張を感ずることなく読むことは不可能である」とし、

「申し立てのすべてを容認することはあまり賢明ではない」

と、はつきり言いきっている。これは少数判決とはなったが、判決文の一節であり、よつて松井、広田両被告は南京事件による責は無罪としている。このパールの判決は、その後しばらく、発表することさえ禁じられたのだが、反日感情がきわめて強い、オランダのレーリンク判事ですら、

「不公正に証拠を解釈し、また無視さえもし判決は下された」

と、その後いいきっているほどで、またパール判決を強く支持している。

さらに興味深い事実は、一般市民を殺害した罪というなら広島、長崎にたいする原爆投下の罪も同様と、ブレイクニー弁護士が痛いところを衝いたことだ。しかし、裁判所がこれにどう対応したかという、通訳が打ち切られ、記録からも削除さくじょされたことである。

都合の悪いことは、一切審理しないということだ。人道上の罪ということに關しても、こうして巧みに切り抜けていったのである。

それでも、さすがに三十万では多すぎると思ったのか、判決では虐殺二十万以上となっている。

適当に数を按配あんばいしたということか。

もちろん日本軍による不法行為が、まったくなかったなどという気はさらさらない。それは七万余の軍隊がいて何も起きなかったということはありませんからで、これは誰しもが思うごく常識的なことだ。

大西参謀が強姦している兵をはりとばし、憲兵隊へ引つ張つていったというように、こうしたことは各所であつたに違いない。掠奪も殺人も、これも絶無とは言いがたい。特に將兵は便衣兵の出没に神経をいらだたせていたし、少しでも疑念があれば射つたであろう。また、食糧の徴発もあつた。

しかしこうしたある程度の不祥事は、残念ながら避けられないのだ。だからこそ松井大將が事前に軍規の引き締めを厳しく指示し、その防止にとめたのであつた。だがそれでも、様々なことがあつた。憲兵隊から、

「將校以下数十件の違法行為あり。これらは軍法會議に付し、嚴重に処罰す」

との報告を聞いた大將は激怒し、入城後各師団長などを前にして、激しい叱声をとばした。

これもまた、その後誤解を生むことになつたが、中国を愛する松井大將ならではの言であつた。しかし平和な今日でも、殺人、強姦などの犯罪は毎日報じられているし、それこそ東京だけでも不祥事零という日はありえないのだ。それを、スノーやティンパリーのよう(注: 原文ママ)に誇張し拡大して

いったら、現在の東京とて、とても人間の住めるところではないという、恐ろしい街ということになってしまふ。

まして殺氣だった戦場に七万余の将兵がいるのだ。また、思いあがった横暴な将校もいたであろうし、兵の中には、やくざもいたであろう。刑務所帰りだっていたに違いない。所詮人間の集団であれば、いかなる場合も玉石混濁いんとうどんなに軍規をひきしめても、何事も起きないということはありません。悲しいかな、それが本当のところなのである。

だがそれらをもつて大虐殺にすりかえていったなら、大虐殺はどこにでも存在することになる。

結局東京裁判は、

「法的外観をまもつてはいるが、本質的には政治目的を達成するための方便にすぎない」

というパール判事や、フランスのベルナル判事の言を今一度思い起こすべきである。また、「連合国の最高司令官といえ、勝手に法を制定することは許されない」

とのパール判事の判決文も至言であり、さらに、これも当初から指摘されていたのだが、法の鉄則たる「不遡及ふそくの原則」を無視し、勝手に作った法をもつて日本の過去を遡さかのぼって裁いたという大きな誤りも犯した。

とにかくここでは南京事件のみに焦点を絞ったが、東京裁判そのものがまことに不条理、不公

正であり、裁きとは言えぬ裁きであった。これはパール判事、レーリンク判事、ベルナル判事などの言を待つまでもなく、証言や証拠書類、そしてその扱い一つ見ても分ることで、その後も国際法の権威英国のハンキー卿、米国最高裁のダグラス判事など、世界の法学者がひとしくその不法性を認めるところである。

したがって、

「東京裁判で事実とされたのだから、南京事件は本当にあつたのだ」
というような論法は、まったく成り立たない。これだけは明白である。

この東京裁判を、一日だけを除きそのすべてを法廷係として傍聴ぼうちょうした富士信夫氏は、こうした不正義をつぶさに見、そして聞いてきた数少ない歴史の生き証人だが、氏はその記録とも言うべき『私が見た東京裁判』という著書の中で、この南京事件なるものが、いかに不公正な審理のもとに作られていったかを記しておられる。そして、

「正義の女神が公平な裁定をしてくれる日が、一日も早く日本にやってくるように衷心から願う」

と、その上下千百頁に及ぶ、長大な文章を結んでいる。この稿も、それによるところ大なのだが、同時に思うことは、裁かれるべきは日本ではなく、むしろこれらの源を作ったスノーなどの

記事であり、そして何よりも東京裁判そのものなのだ、ということであった。

だが思うに東京裁判から、はや半世紀の歳月が流れ去ろうとしている。にもかかわらず、いまだにこの過ち^{あやま}多き呪縛^{じゆばく}から逃れえず、依然としてこれを元とした論議をするなど、これほど愚かなことはない。

ここで参考までに、あの湾岸戦争のおりのことを記しておこう。あの米軍進攻の、半年前のことであった。米議会人権委員会において、ナイラというクエート少女が証言にたった。そして、「イラク人兵士が託児所に侵入し、幼児をベッドからとりだし、床に放り投げて殺しました」と、涙ながらに訴えたのである。この少女は、さらに国連安保理の公聴会でも同様に証言し、ブッシュ大統領も、この証言を再三にわたって引用した。

こうして議会も、そして何よりもアメリカの国民一般の世論が、米軍進攻にかたむいていった。もちろん、この証言だけが議会や国民の世論を作っていたとは言えないが、大きな力になったことは事実である。ところがこの少女は、米駐在のクエート大使の娘で、当時クエートにはいなかったことが分つたのである。

そしてこの証言をしくんだのも、広告会社であったのだが、国際間には常にこうした宣伝合戦、情報戦争がある。昭和十六年の開戦時にも、同じようなことがあったのだが、思うに、南京事件

も、教科書にまで載るといふことは、結局、宣伝戦での負けといふことなのだ。

三 戦後の南京事件

焼跡から復興へ、それが戦後日本の第一歩であった。そしてそれが、めざましい経済発展へと連なつていったのだが、その間東京裁判の痛みなども、いつしか忘れ去られていった。

ところが、世上に日中の国交回復が話題にのほり始めた、昭和四十六年頃、何を思ったか朝日新聞が突如として南京事件の連載を始めたのである。向井少尉も再び登場したのだが、今度は戦闘での斬りあいから、あたかも一般市民を百人斬ったかの如き筆法での登場である。

つまり、日本人自身の手によつて、より残虐な話となつて出てきたのであった。またそれに続く中国人の証言などにしても、まったく気分が悪くなるほどの残虐ぶりが次々と語られていく。

平和な世であるだけに、その残虐さはよりいっそう強烈な印象となつて、読者の眼に映じたのだが、ある人は東京裁判を思い出し、またそれを知らぬ世代は、初めて日本軍の非道ぶりに一驚した。

そしてついには、それが教科書にまで載るに至つては、南京事件はもはや動かしがたい事実で

あるかの如き印象を世の人々に植えつけていったのである。

やはり新聞の影響力というものは、部数が多いだけにきわめて強力である。だがこの記事に疑念を抱いた鈴木明氏は、当時の参戦者を訪ね歩き、記事とはまったく違う事実を把握し、それを『南京大虐殺のまぼろし』という本にして発表した。

続いて田中正明氏が、これまた詳細な研究を『南京虐殺の虚構』『南京事件の総括』などにまとめ発表され、また阿羅健一氏も『聞き書き南京事件』を出版された。この他渡部昇一氏、山本七平氏、板倉由明氏なども同様趣旨の主張をその著書や雑誌などに出しておられるし、また石原慎太郎氏も、

「南京事件は中国人の大嘘」

との発言をされたのは、よく知られるところである。

こうした動きに刺戟され、当事者である旧軍人の集いである偕行社かいこうも、分厚い『南京戦史』をへんさん編纂されたのだが、これだけ多くの方々の労にもかかわらず、南京事件は依然として完全に否定されず、それどころか現場の南京には虐殺記念館まで建てられ、三十万という数字が正面玄関に大書されるというのが現状である。これらの現象を改めて俯瞰ふかんすると、活字のおそろしさというものに、ただ驚きいるばかりである。

もしティンパリーやスノーが、正当な取材を元に、普通のあるべき報道記事を書いていたら、東京裁判でも南京事件なるものは、俎上そじょうに乗らなかつたに違いない。とすれば、もちろん今日のような大虐殺論議は生じなかつたであろうし、向井氏ら三人と松井、広田のお二人も殺されることはなかつた。

さらに思うことは、南京法廷や東京裁判までのことは、終戦処理の一環として仮に諦めたとしても、もし二十年ほど前に行なわれた朝日新聞の虐殺報道の連載がなかつたなら、やはり今日のような虐殺論議は起こらなかつたであろう。東京裁判でのことは、完全に歴史の一頁となり、一般の人々が思い出す機会などまづもつてなかつたに違いない。もちろん、教科書に載ることもなかつた。

とすれば、結局今日のように大虐殺とはやしたてられ、歴史上の汚点として残るようになったのは、ひとえに新聞の連載記事にあつたと言つていい。それが事実であれば、報道は当然あつて然るべきだが、あの都城でのこと一つ見ても、虐殺があつたとしていたい意図がはつきりとうかがえるだけに、同じ日本人としてまことに残念な思いが残る。

それは、これによつて日本軍の残虐性を広く世界に印象づけてしまったからだ。となれば、今度の戦争とはまったく無縁な若い世代も、またその次の世代もと、いつまでもこの負い目を、日本人であるかぎり背負つていかなければならなくなる。

それは勢い心の面のみ止まらず、外交交渉や経済問題にまで微妙な影をおとしていくことになりかねない。現に、こんな一齣ひとじまがあつた。

数年前、高知の高校生が修学旅行のおり上海で列車事故に遭い、多数の死傷者をだしたことは記憶されていると思うが、その補償交渉のため来日した中国側は、はからずも席上南京事件を口にしてゐる。

それでも補償はまったくもらっていないと言ふのだが、もちろん日本側の弁護士が、問題がまったく違ふという反論はしていたが、はたしてこの交渉にまったく影響を与えなかつたか否か、これは微妙なところである。

ではかほどまでして、何故虐殺があつたとしたいのだろうか。いったいそのようなことをして、何の利があるというのか。

日本の新聞の多くは、戦後四十余年、一貫して左翼礼讃の論調を続けてきた。労働組合の主張はいつも正しく人道的であり、権力者のやることは、いつも不公正で社会正義に反することだ、と言いたげな活字で紙面は飾られてきた。

まともな政策論争を挑むなら、大いに結構なのだがそうではなく、政府与党を中傷したり、小馬鹿にするような論調が多かつたのだが、結局のところ南京虐殺の主張も、これと無縁ではなさ

そうだ。

つまりそれらの新聞は、社会主義こそ絶対正義だとする一つの理念があつて、そこから紙面構成のすべてが出発している。したがつて今の体制側、つまり政府は敵であり、打倒しなければならぬ。ということとは、要するに一口で言えば、革命志向なのである。とはいへ、現在の日本に武力や暴力は通用しない。だからこそ言論によるそれへの誘導が重要になつてくるのだが、その手初めが体制の徹底否定であつた。

そして同時に否定さるべきは、日本古来の伝統であり、歴史であつた。就中、皇室の存在は社会主義にとつては大きな障害であり、皇帝制打倒こそが革命の第一歩であることは、その教書にも明示されている。

だが日本においては、この壁はあまりにも厚い。とにかく国民の絶対多数がこれを支持し、心情的にも一体感を抱いているだけに、皇室にたいするあからさまな批判攻撃は、戦術としてもとれない。しかし、その周囲にある神道や国旗、そして国歌や靖国神社に至るまで、古来の伝統と直結するものにはたいしては、それなりの攻撃がかけられる。

憲法とのからみやらで、時折具体的な問題を提起してくれることもあるのだが、中でも戦前の軍隊は天皇の直率であつただけに、これは攻撃目標として絶好のものである。その残虐性と不法性を強調できれば、それこそやんわりと天皇制否定へと民心を誘うことができる。

天皇の軍隊が、いかに残虐であつたか、いかに悪逆非道の限りを尽くしたか、これらを説くことは、最も分り易いが故に、強烈な印象となつて大衆の心に食い込んでいく。これほど効果的な体制否定はない。

こうして、その象徴的な存在として南京事件が登場するのだが、いま一つ付言しなければならぬのは、こうした格好の素材を掘り起こし、署名入りの記事を連載できるとなれば、記者としてその有能さを内外に示すことができる。言うなれば、花形記者として脚光を浴びることができるのである。

左翼礼讃という社内の雰囲気と、この個人的野心願望と、何れが優先してのことかは分らないが、とにかくこれらの要因が作用してのことだけは確かである。

もつとも、その左翼礼讃も、ただ時流にのりたいたがため、大衆への媚びこというきわめて軽薄なものではないのだが、具合が悪いことに、その弊害だけはいつまでも、根強く残つてしまう。

四 新聞と映像の影響

これら一連の記事のように、ある意図あつての捏造、あるいは誘導的な偏向報道などは論外だが、そうではなくごく普通に行われる日々の報道が、世上にどのような影響を与えていくものか、最後にそれに触れて終わりとしよう。

支那事変直前、激しい排日毎日の中に在って、様々な事件を内地に伝えていった、同盟通信の上海支局長松本重治氏は、その著『上海時代』の中で、こう回想されている。

「ニュースの取扱い如何によつて、想像も及ばぬようなインパクトを軍部、政府、および全国の輿論よろんに与えるものだ」

として、軍艦出雲の水兵殺傷事件の例をまず挙げているのだが、確かに現地にいる日本人としては、同胞を殺されたという憤激は並たいていのもではあるまい。

しかもその迸りほとばし出る口惜しさを噛みしめながら、記者としてなるべく印象深く書くという、この二つが相乗し、記事そのものがついつい激烈な調子になっていく。これは、誰しもが容易に察

しがつくところである。

「その入電ぶりはすこぶる派手な内容で、かつ多彩多量であつたから、翌日の各紙朝刊の紙面では、『田港事件』とか『海軍の重大決意』については十二段を割いて、大々的に報道され、国民感情を昂奮させてしまつた」

と、いう。田港というのは殺された水兵の名で、それをそのまま事件名としたのだが、こうして内容が派手な上に、さらにそれが大きな活字になつて、新聞の一面を飾るとなると、確かに印象は一段と強烈なものとなる。一般大衆がそれを眼にして興奮するのは当然だが、それでも大衆が興奮し怒つたとして、まだ外交交渉に直接影響はない。

しかしその煽り^{あお}りを、さらに当事者である海軍当局が受けると、これは影響が大である。果たせるかな海軍は、その日のうちに、

「海軍側の『対支那処理方針』なる、もの凄い作文を作つてしまつた」と、いうのである。

確かにこれは、分る気がする。人間の心というものは、周囲の雰囲気にはそれだけ感化し易いものであるし、そうでなくとも血の氣の多い若手の軍人が、そうした影響をまともに受けたとしても、少しも不思議はない。

そしてさらに、その海軍の強硬方針は外務省に波及し、川越大使への訓令にも響いていくのだ

が、この昭和十一年秋は、北支問題等困難な懸案を抱えている時だけに、その影響はまことに大きい。こうして外交交渉も、次第に強硬路線が定着していくことになる。

こうした流れの中で、蘆溝橋事件が起きるのだが、そうでなくとも中国側が以前から徹底した排日教育とその宣伝をしていたためもあって、抗日侮日の国民輿論が渦をなしていた。

また日本も国民感情が興奮しているとあつては、不拡大、局地解決という冷静な判断も、とかく軟弱、消極論と見做され、世上には通用しがたいことになる。しかも新聞論調は相変わらず華やかで、血気にはやる若手将校らも、

「对支膺懲」

を叫び、即時出兵を強硬に主張する。そして八月九日、上海で大山勇夫中尉が殺害されるや、その勢いは頂点に達し、戦火はついに上海にまで拡大されていった。

この時、即時出兵論にたいし、参謀本部の石原莞爾第一部長（作戦）は、

「出兵すれば全面戦争となり、広い大陸では泥沼化し動きがとれなくなる。第一、そんな余裕兵力はない」

とし、説得に廻つたが結局は敗れ去る。武藤章作戦課長、田中新一軍事課長、永津佐比重支那課長など若手急進派が勝を占めたのである。完全な下剋上であつた。

ことの成り行きというのは、おおかたこういうもので、「よしやれ」という景気の良い感情論

が勝ちを占める。正統な論は少数派となり、怒号の中にかき消されてしまう。しかもその時、周囲が煽りたてれば、火に油を注ぐようなもので、ますます景気よい武断派は勢いづく。

こうした状況の中、石原少将はついに辞任に追いこまれ、関東軍の参謀次長として満洲に飛ばされてしまうのである。

今日の歴史では、何事も軍部独走として日中激突の責を、すべて軍にのみ転嫁するのが当然のようになっているが、実際はそう単純なものではない。報道も、また国民大衆も、そして政治家も、確かに興奮し、むしろ軍部の尻を叩いていった形跡が多分にある。

もちろん、統帥権を盾に政治を壟断していった一部軍人の行為はあるまじきものではあるが、さりとて軍人以外の人々に責任がまつたかという、かならずしもそうとは言えない。それを容認し、また後押しすらしていった各界の人々すべてに責任はある、というよりほかはない。この南京陥落のおりには、国民は熱狂し、日本中が祝賀会と提燈行列の坩堝と化していったのである。

当時、左翼政党の代議士であった加藤勘十氏たちですら、酒樽を持って南京の軍司令部へ駆けつけ、祝杯をあげている。まさに軍官民一体、国を挙げての盛事となっていた。こうした状況からしても、その責というなら、その御輿を担いだすべての日本人にある、というよりほかはない。この時出兵に反対した石原莞爾とて、五年前には中央の意向に背き、満洲の広野に戦火をあげ

ていったその張本人であつた。だが今度は逆に北支の現地軍に、そしてお膝もとの参謀本部の若手將校によつてその下剋上をやられたのだが、これも自ら範を示したとあつては文句も言えないという皮肉なめぐりあわせになつた。

だがこうした戦争への雪崩現象の中にも、ほんの一握りの人々ではあつたが、戦争への反対を唱えた人もいたのである。しかしその良識ある声も輿論という大きな渦に巻きこまれ、非国民の名のもとに、はかなく消え去つていったのである。

いつの時代でも、輿論なるものがいかに間違い多きものかということ、改めて考えさせられる一齣^{ひとしほ}ではある。

こうした国内での大きな動きの中で、特に注目すべきは、ほとんどの人が気づかぬうちに、陰の主役というか、陰の演出者ともいふべき役を演じてしまつたのが、今も触れたように、実は新聞の紙面であつたということだ。

松本氏と同じ同盟の前田雄二氏は、この時まだ東京に在り、上海からの電文を受け取り、それを活字にする側にいたのだが、氏も戦後になつてまったく同じことを指摘されている。

「個々の衝突がその都度大きく取りあげられ、これが『暴支撃つべし』という強硬論となり世論を燃えあがらせた。この空氣が軍の拡大論者を勢いづかせ、慎重論を後退させた」

結局これらの感慨はこのお二人だけでなく、当時報道関係者の多くの人が、

「少々煽りすぎた」

と、感じていたに違いない。

しかし人間の心というものは、そういうもので、他からの暗示にはきわめて影響され易い。ただだからこそ大勢にも流され易いのであって、常に輿論よろんという群衆心理が優先するが、この時も結局は出兵と決し、大陸での戦線は次々と拡大され、石原莞爾が予想したとおり、泥沼に足を踏み入れた状況になっていく。そしてさらに仏印、今日のベトナムへの進駐を生み、ついには米英戦にまで突っこんでいったのだが、今にして思えば、昭和十二年当時はまさに、その重大な分岐点にあったわけだ。

またそういう緊迫した状況であるからこそ、若き記者諸公も血をたぎらせていったのであろうが、結果としては、煽あおることになった。やはりこれは、大きな教訓として記憶に留めおくべきことだ。ただ意図的なものではなかっただけに、お二人の率直な反省的回想となったのであろうが、まことちよつとした筆法如何によって、新聞の記事が国家国民の命運にまで影響を与えるのだから、活字というものは恐ろしいものである。

五 戦後の新聞とテレビ

1 左翼礼讃とその弊害

戦後の新聞は、戦前とはまったくの別のものとなって登場してきたのだが、その特徴は、何といても、一貫した左翼礼讃の論調であった。では、その影響と成果のほうはどうであったかという点、どうもこれは、あまり実績はあがらなかったようだ。

その証拠に左翼政党は、相変らずの先細り傾向というより、はや、ここにいたっては転向せざるをえない状況にまで追いこまれているのだが、これは、新聞やテレビという応援団がいかにかに旗を振っても、試合は思うにまかせず、また大衆も踊らなかつた、ということだ。

第一、そうこうしているうちに、社会主義そのものが世界から否定されてしまった。ベルリンの壁が崩れ、東欧の国々が民主化し、ついには本家のソ連までが解散するにいたっては、日本の

応援団も、如何んともなしがたいであろう。

レーニンの銅像が引き倒され、姿を消していったのと同様に、日本のマスコミからも、さすがに左翼礼讃は影をひそめつつある。だがそれでも、さまざまな後遺症をのこしてくれた。中でも権力にたいする蔑視軽視の風潮を残してくれたのは大きく、今日ではこれが、すっかり国民大衆に根付いてしまった。

それは、まともな政策論争ではなく、政府与党という権力者を小馬鹿にし、あたかも賢者が愚者にたいするかのような、いとも見下した論調が、そのまま国民の政治にたいする意識となつて、定着してしまった、ということだ。

しかし、これは恐ろしいことで、いわゆる政治にたいする、「しらけ」の現象を生む元になつていくのだが、現代は権力者といつても、それは我々国民大衆が選んだ人々であり、むしろ国民のほうがその人々に政治をお願いしたのである。昔の悪代官ではあるまいし、悪いと思えば四年たつたらいつでも代えられるのだ。

したがって政治をお願いしたからには、それなりの敬意を払わなければならないのだが、左翼礼讃の志向からはこうした発想は出てこない。ただもう小馬鹿にし、足を引っ張るばかりなのだ、それはそのままそれを選んだ国民大衆を愚弄ぐろうしていることにもなる。

しかもそうしたことが、進歩的な報道姿勢であるかのような錯覚さくかくを抱いてきたのだが、その結

果、政治にたいする「しらけ」を生み、大衆と政治とが遊離していったのでは、国家国民にとって、これは大きな損失である。

しかもこれは、単に政治のみに止どまらず、権力者を小馬鹿にする風潮は、それがそのまま、社会全般にまで及び、会社では上役、学校では教師、そして家庭では両親という、いわば小さな権力者を小馬鹿にする、という風潮にまで連なっている。

これには教育の左翼傾向も相乗しているのだが、教師がそれを押し進めるほど、教師自身が軽視され蔑視されるという、皮肉な現象を生んでもいる。要するに、何でも逆らつて、へらへらしければ、かつこいいということらしい。

とにかく、こうした現象を生むような報道や論評が、映像から活字からと毎日毎日、それも幾度も心の中に注入されていけば、それこそ潜在意識にまで浸透し定着していくのも当然である。これでは、親の言うことも聞かなくなるし、教師に尊敬の念を抱くことも、なくなるであろう。少々飛躍と感ずるむきもあるかもしれないが、新聞が結果として軍部を煽つたのと同様、人間の心というものは些細な暗示づけにもすぐ誘導されてしまうものなのである。例えば、小さい児に、

「お前は、馬鹿だ」

と毎日ことあるごとに言っていたら、どんな児でも自信を失ってしまうものだ。その点活字から受ける印象より、映像から受ける印象のほうが遥かに強烈であり、また回数も多い。その上、政治問題とはいえ、低俗化しているから、よりいつそうとつき易い。ついつい見ていると、知らず識らずのうちに、いつしかその傾向性に同化されてしまうという恐ろしさがある。

これは、年齢が若ければ若いほど心が白紙に近いから、同化の速度も速いことになる。最近では、戦前の歴史や軍隊にたいし、あるいは国旗や国歌にたいしてまで、それをよく知ろうとする以前から、すでに心の中に一種の抵抗意識があつて、聞く耳を持たぬとも言いたげな人がかなりいる。極端な話、愛国心すら悪と思つている人がいる。家庭を愛し、故郷を愛し、そして国を愛する、これは自分を生かしてくれているものにはたいし抱く、ごく自然な情愛ではないか。

だがこうした心の傾向性も幼い頃からの映像、活字、そして教育の場と、次々と受けた印象づけが蓄積し、心の奥底、つまり潜在意識までがそうなることに違いない。とにかく、初めから一つの傾向性という色眼鏡で見れば、実相は見えてこない。

保守と革新という言葉が登場させ、政党を二つに区分していったのもマスコミだが、誰だつて「このまま」というよりは、「古きを改めより新しいものを創造していく」ことのほうに魅力を感じるのは当然である。だが実際にはどうであつたかという点、いわゆる革新という政党は、何で

も反対で、結局は何も創造をしてはくれなかった。

しかし、革新と呼ばれることによつて、創造への予断を与えていったことは事実で、魅惑的なものだと、感じさせていったのだから、これも一つの色眼鏡であり、大きな支援となったことも否定できない。

それと、もう一つ怖いのは、たんにマスコミ関係者だけの考えであるにもかかわらず、それを平気で「国民の声」だとか、「輿論」というものに置き換えてしまうことだ。しかもそれが、大きな流れであるかのように印象づけ、暗示づけをするから、すぐそれに乗りたくなるのが心理で、これもその盲点を巧みに衝いたものだ。

いずれにしても、政治の体制などというものは、国民大衆の意のまままでよいので、強いてこれを誘導するなど、まったく必要がない。いやこれは、断じてしてはならないことだ。

やはり言論も、それに与えられた自由も、世の中をより良くせんがための方便として認められているもので、これから良識をとつたら何も残らない。むしろ無いほうがいいことになる。

2 人心の荒廃と犯罪の激増

偏向した報道姿勢もさることながら、いま一つ人心荒廃の要因をあげておくと、それは映像を

通して茶の間に送りこまれる殺しや暴力である。

これもまた、毎日毎日よくまあ飽きもせずと言うほかはない、殺人と暴力の放映で、それなんだんと残酷性が強くなっていく。もちろんこれらは劇であり、創作なのだから、人を殺すといつても現実の世界ではない、面白く楽しめればそれでいいではないか、と誰しもが気楽に考え少しも怪しむところがない。

しかし、本当にそれだけで終わっているのだろうか。人間の行為行動というものは、その潜在意識に支配されているのだから、要はこの心の奥底に悪いものを集積させないことなのだ。人間生きていくかぎり放っておいても日々心の奥には何かが溜っていく。だから同じ溜めるなら、より良いものを溜めるほうが人間幸せになり易いのだ。

だからこそ孟母三遷^{さんせん}ではないが、より良い環境をと、人間は考えてきたのではなかったのか。古の人^{いにしへ}でさえ、そこまでものを考えていたのだが、それでは今日のこの殺しと暴力の氾濫^{はんらん}は、どうであろうか。これが人の心に何の影響も与えない、と思っっているのだろうか。

幼い心に、あるいは若者に、あるいは大人だっけそうだが、日々麗しい人間の生きかたを見て感動していくのと、暴力と殺しに明け暮れる醜^{みにく}い人間像を見ていくのと、どちらが情緒が安定し穏やかな人柄が作られていくか、それは考えるまでもなからう。そうでなくとも、潜在意識なるものは、一度貯蓄^{ひとたひ}されたとなると、なかなかその転換はむづかしいのだ。気弱な人間が、しっか

りしようとはどんなに苦勞するか、それ一つを考えても分ることだ。

暴力は強度の他人否定であり、その極みが殺しである。つまり殺しと暴力が、たとえ劇といえど、心の奥底に植えつけられていったら、自己主張と他人否定の傾向性はより強くなり、人に迷惑をかけるくらいは何とも思わない、という精神構造になり易い。自分の慾望を満たすためなら、何でもやる。

こういう人間が多くなれば、この世はきわめて住みにくくなるのは当然で、特にその周囲にいる人はたまつたものではない。それでもまだ、一面において人間のあるべき姿というものは承知しているから、つまり抑止力がきいているから、法を犯すまでには至らない。

しかしこれが、何かのはずみでその抑止力がとれてしまうと、これは恐ろしいことになる。特に人間というものは、人がやったことがないようなことは、まずもつてできないが、何人もがそれをしたとなると、途端に現実性を帯びてくるもので、そこに全体的な意識水準が大事になってくるのだが、右でも左でもやっていると、これはもう安心して倫理の枠もはずせることになる。

そうになると、理性の働きまでも鈍り、いかに上手に盗めるか、騙せるか、将又うまく人を殺せるかと智慧を絞ることになる。しかもその具体的方法は、映像でいつの間にかやらとつくりと教えられている。ここに、犯罪養成講座は現実のものとなって現れてくるのだが、それでもそこまで

発展するのは、今のところ例外的と言つていいほど数は少ない。だが考えるべきは、

「人間の心の中に描いたものは、たとえそれが空想であれ、単なる想像であれ、常にそれを現実化しようとする力を秘めている」

と、いうことである。

現に、病などでも、治ると思つている人のほうが、駄目だと思つている人より、はるかに治る確率がたかいのである。

とにかく、表面に出る例は少ないが、人心荒廃こうはいを招いていくことだけは確実に、おそらく映像から残酷性と血腥ちなまぐさい光景が消えたなら、十年もたたぬうちに、犯罪は今の半分以下にはなるであらう。

この世の中を、平穩で暮らしよい社会にしたいのなら、映像も活字も、そしてさまざまな雑誌なども、それに相応あきあしい素朴で良識のあるものにしなければ、いつまでたつても良くはならない。なにしろ、これらは日常生活の隅々までに浸透していて、映像の喋りしゃべかたまるですぐ人々は真似をする。それが良いか悪いかの判断もなく、すぐ子供のように真似をする。しかし早口競走ではあるまいし、人間落ち着いた時には、あんな喋りかたはしないものだ。日本語には間まというものがあり、ゆとりというものがある。明らかな発音にもなるのだ。にもかかわらず、やたらに

忙しなさを掻きたてるのはいかがなものか。

それはともかく、殺しや暴力の放映、そして何よりもイデオロギー闘争のためには手段を選ばぬという、あのやり方くらいは、もういい加減に卒業してもらいたいのだ。一日も早くそれをしないと、そのうち日本も物騒で夜の外出もできないという犯罪社会になってしまふだろう。

それでもなおかつ言論の自由、表現の自由などと言うのなら、それこそ万引きや窃盗だつて御自由ということにしなければ、釣り合いがとれぬ。世の中にとっては、そのほうが遥かに被害は少ないのだ。

自由というものは、他に迷惑も危害も与えない、という厳しい制約があつてこそで、それを逸脱した時には不自由な塀の中に入れてもらわねばならない。権利ばかり主張したがる近代合理主義や唯物論は、所詮ゆきづまる。それはすべてが、自己の利追求からきているからだ。

とにかく電波による映像は社会の公器であり、国民共有の財産であるからには、世の中をより良くするためのものでなければならぬ。新聞もまた、同じである。どうやって人を巧く殺せるか、などという妙なことに智慧を廻らせなくとも、楽しいものはいくらでもあるではないか。

いや、もっと積極的に、科学的にはこれだけの素晴らしい開発をなしえたのだから、これを政治、経済、社会、藝術、医療とあらゆる面にもっとより良い活用を考えたらよい。そして、論議

があるなら終日したらよいし、各界各層の意見を広く紹介していったらよい。

愚劣な番組が、これらにとって代つて無くなるだけでもその効果は大きい。この辺のところは、金を出す^{スポンサー}広告主として考えて欲しいものだ。同時に映像や新聞の弱点は、批判する機関がないことだから、これらを批判していく映像そのものを常時保持していくことだ。そして歪みは、それが少しは正してくれるであろう。

戦前の報道のように、悪意もなく、むしろ憂国の情をもつてした記事でさえも、結果として戦争への道に駆りたてていったという苦い経験も無にしてはならない。ところが今日では逆に足を引く張るばかりで、政治家は叩かれるのを恐れ、ものも言えぬように萎縮している。これでもまた、国を誤る。

何れにしても、世の中を良くするも悪くするも、映像と活字次第だということを再認識し、これを再検討する必要性がある。だからこそ、ごく平凡な、あたりまえの良識が通用する電波であり、活字であつて欲しいのだ。

活字によって作られた南京大虐殺も、その意味においてよき教訓となれば、もつて瞑すべしである。

(完)